

日田地区遺跡群発掘調査報告5  
日田市埋蔵文化財調査報告書第55集

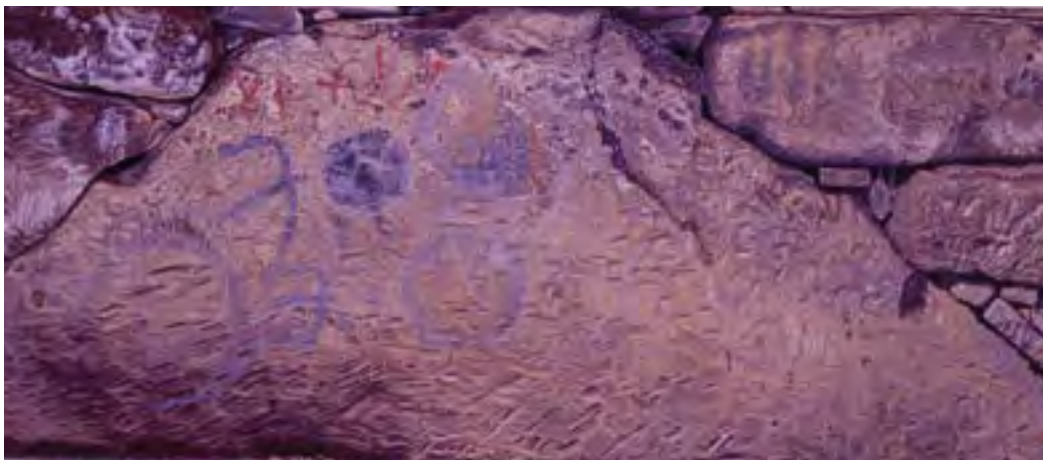
# 穴 観 音 古 墳 II

2004年

日田市教育委員会



1



2



3

穴観音古墳の日下八光先生模写絵写真（国立歴史博物館提供）

1 前室右側壁 2 前室左側壁 3 玄室右側壁

## 序 文

穴観音古墳は大分県下では古くから知られた装飾古墳で、人物や船、同心円文などの装飾壁画が描かれ、昭和8年に国の史跡指定を受けた日田市を代表する貴重な古墳の一つです。

ところが、近年では古墳の封土の流出が目立ちはじめ、さらには壁画の老朽化が著しくなり、また一方では古墳周辺にまで住宅建設などの開発の波が押し寄せるなど古墳の本格的な保存対策が急務となってきました。

そこで、当委員会ではこうした課題に対処し、将来的な保存に向けての事前措置として史跡の指定範囲の検討を目的とした確認調査を実施することにしました。

その2年次にあたる今回の調査では、古墳周囲の周溝の形状や規模などが確認でき、しかも周溝からは須恵器や土師器といった多くの土器が発掘されるという大きな成果を収めることができました。

この調査報告書が今後、古墳の保存対策の一助となり、さらには地域の歴史解明や学術研究、学校現場での教材などの基礎資料として幅広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査中にご指導賜りました小田富士雄・後藤宗俊両先生をはじめ、調査に従事いただきました作業員の皆様方や、調査にご協力いただきました土地所有者の方々に、心から厚くお礼を申し上げます。

平成16年12月

日田市教育委員会

教育長 諫 山 康 雄

## 例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成 15 年度に国庫および県費補助を受けて実施した穴観音古墳 2 次調査の発掘調査報告書である。
2. 同古墳の調査は、すでに当委員会が平成 13 年度に確認調査を実施し、「穴観音古墳」として報告していることから、今回は「穴観音古墳Ⅱ」として発行する。
3. 本書には、2 次調査の記録に 1 次調査成果も含めて掲載している。
4. 調査にあたっては、土地地権者である野村覚、野村恒太両氏のほかに、地元の中村剛健氏らの多大なるご協力を受けた。
5. 調査現場での実測は土居・森山敬一郎（雅企画有限会社）、写真撮影は土居が行なった。
6. 本書に掲載した遺物実測は土居のほか雅企画有限会社が行い、遺構・遺物の製図は藤野が行なった。
7. 遺物の写真撮影は、長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。
8. 巻頭図版に使用した写真は日下 榮氏のご了解をいただき、国立歴史民俗博物館所蔵の原板を借用して掲載した。また、写真図版の空撮写真は平成 13 年度の 1 次調査で撮影したものをを用いた。
9. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
10. 図面の方位は磁北を指す。
11. 本書の執筆はⅠ～Ⅲを土居、Ⅳを土居・若杉が行い、編集は土居が担当した。



日田市の位置図

## 本文目次

I. 調査の経緯	1
(1) これまでの経過	1
(2) 穴観音古墳の概要	3
(3) 調査経過と組織	4
II. 遺跡の立地と環境	5
(1) 遺跡の位置と地理的・歴史的環境	5
(2) 日田盆地の古墳と横穴墓群	7
III. 調査の記録	11
(1) 古墳の現状	11
(2) 調査の概要	11
(3) 基本土層	13
(4) 1トレンチの調査	13
(5) 2トレンチの調査	20
(6) その他の出土遺物	27
IV. まとめ	29

## 写真図版目次

巻頭写真図版	穴観音古墳の日下八光先生模写絵写真
写真図版1	穴観音古墳空撮
写真図版2	1トレンチ遺構検出状況、同周溝検出状況
写真図版3	1トレンチ周溝検出状況、同周溝遺物出土状況
写真図版4	1トレンチ周溝遺物出土状況、同周溝発掘状況、同周溝土層断面
写真図版5	2トレンチ遺構検出状況、同周溝検出状況
写真図版6	2トレンチ周溝遺物出土状況、同周溝発掘状況、同周溝土層断面
写真図版7	2トレンチ周溝発掘状況、同発掘状況
写真図版8	1トレンチ周溝出土遺物
写真図版9	1・2トレンチ出土遺物
写真図版10	2トレンチ出土遺物、その他の出土遺物

## 挿入写真目次

写真 1	昭和 44 年以前の古墳	1
写真 2	石室に安置されている観音石像	1
写真 3	調査風景	13

## 挿図目次

第 1 図	穴観音古墳の石室実測図 (1/120)	3
第 2 図	穴観音古墳の文化財指定範囲地籍図 (1/1000)	3
第 3 図	穴観音古墳の位置図 (1/5000)	6
第 4 図	日田盆地の古墳・横穴墓群分布図 (1/25000)	9・10
第 5 図	穴観音古墳周辺地形測量図 (1/800)	11
第 6 図	トレンチ配置図 (1/200)	12
第 7 図	1 トレンチ遺構配置図 (1/60)	14
第 8 図	1 トレンチ北側壁土層実測図 (1/40)	15
第 9 図	1 トレンチ周溝サブトレンチ 2 土層実測図 (1/40)	15
第 10 図	1 トレンチ周溝・1 号土坑実測図 (1/40)	16
第 11 図	1 トレンチ周溝出土土器実測図① (1/3・1/4)	17
第 12 図	1 トレンチ周溝出土土器実測図② (1/3)	18
第 13 図	1 トレンチ 1 号土坑出土土器実測図 (1/3)	19
第 14 図	2 トレンチ遺構配置図 (1/60)	20
第 15 図	2 トレンチ東側壁土層実測図 (1/40)	21
第 16 図	2 トレンチ周溝実測図 (1/40)	22
第 17 図	2 トレンチ周溝出土土器実測図① (1/3・1/4)	22
第 18 図	2 トレンチ周溝出土土器実測図② (1/4)	23
第 19 図	2 トレンチ周溝出土土器実測図③ (1/4)	24
第 20 図	2 トレンチ周溝出土土器実測図④ (1/4)	25
第 21 図	2 トレンチ周溝出土土器実測図⑤ (1/4)	26
第 22 図	2 トレンチ周溝出土土器実測図⑥ (1/3)	27
第 23 図	その他の遺物実測図 (1/4・1/2)	27
第 24 図	周溝復元図 (1/400) とトレンチ出土遺物 (1/6・1/16)	30

## 表目次

第 1 表	1 トレンチ土層対応表	15
第 2 表	出土土器観察表	28
第 3 表	出土石器観察表	28

# I. 調査の経緯

## (1) これまでの経過

### 1. 古墳の史跡指定まで

穴観音古墳は日田市大字内河野字倉園に所在する古墳である。明治12年に発行された『豊後国日田郡村誌』によれば、この古墳は「日下部春里宅址」と記され、当時地元ではそれまで伝承されてきた草壁長者の屋敷跡として周知されていたようである。その後、大正14年の日名子太郎氏による調査報告<sup>註1</sup>では、同古墳を「穴観音古墳ト稱ス 圓塚前室右壁下部ニ彩色ニテ同心圓等ヲ描キ 其室ノ奥室ニ同心圓ヲ描ケリ 此ノ古墳ハ裝飾古墳トシテ 縣下ニ於ケル唯一無二ノモノトシテ

筑後川流域ノ系統ニ屬ス可キモノナリ」と報じ、現在の呼び名が用いられるようになった。その由来については石室内部に安置された数体の観音石像にちなんだことが古墳前面に建立された石碑に刻み込まれており、このほか“蔵園古墳”とか“原の古墳”などとも呼ばれていた。また、少なくとも明治以前には古墳の石室が開口し、石室壁面に彩色が施されていることを地元民は知っていたようである。このように古くから裝飾古墳として知られてきたこの古墳は、県

下唯一の事例として、またその重要性により昭和8年に国史跡の指定を受けた。

註1) 日名子太郎 「速見、玖珠、日田及別府市古墳横穴調査一覧表」『史蹟名勝天然記念物調査報告第4輯』大分縣史蹟名勝天然記念物調査會 1925年



写真1) 昭和44年以前の古墳



写真2) 石室に安置されている観音石像

### 2. 裝飾古墳の調査・研究

指定後の古墳は、安置された観音様へお参りする人が石室内部へと自由に出入りできる状況が続き、これといった調査や保存措置も行われないうえに無防備なままの放置状態が長く続く。昭和25年になると九州大学の森貞次郎先生がガランドヤ古墳を、別府大学の賀川光夫先生が法恩寺山古墳を発見する。これを契機に賀川氏は大分県下の裝飾古墳の精査を行い、壁画等を測量し、この分野での基礎的な研究資料として発表された。さらに、昭和32年には賀川・小田富士雄<sup>註2</sup>両氏による法恩寺山古墳の発掘調査をてがけて大きな成果を上げると、昭和34年には同古墳が国の史跡に、同年にはガランドヤ古墳も大分県史跡の指定を受けるなど、市内に存在する裝飾古墳は全て保存されるにいたった。その後、小田氏は日田の古代史をまとめられ、<sup>註3</sup>その中で市内の裝飾古墳文化の系譜についての考察がなされている。

註2) 賀川 光夫 「大分縣日田市附近に於ける裝飾古墳」『考古学雑誌』第37巻 1951年

同 「東九州地方に於ける裝飾古墳」『別府女子大学紀要』第3輯 1953年

註3) 小田富士雄 「古代の日田 - 日田盆地の考古学 -」『九州文化史研究所紀要』第15号 1970年

### 3. 保存施設の建設

昭和 30 年代後半頃から始まった装飾古墳ブームによって、穴観音古墳を訪れる見学者の数も目立ちはじめると古墳への保存意識も高まり、昭和 44 年には日田市が国庫補助金を受けて、墳丘周囲に高さ 1.3 m、延長 36 m のコンクリートブロックとその上に高さ 1 m の金網のフェンスを張り巡らせた保存施設を建設した。ところが、この工事の際に樹木を伐採したことで根腐れが生じ、そのために石室に雨水が浸透し、壁面にカビが発生する事態となった。そこで、こうした雨水がもたらす影響を防止するために、昭和 47 年には墳丘を覆う木造平屋建の上屋建設と排水工事を行った。

### 4. 日下八光先生による壁画模写

保護措置のとられた翌年の昭和 48 年の秋からは東京芸術大学名誉教授の日下八光先生による穴観音古墳の壁画模写が始まった。これは文化庁の委嘱事業として昭和 30 年から始められた全国の装飾古墳を対象とした保存事業の一環として進められてきた壁画の現状模写作業で、大分県下では昭和 42 年から行われた富貴寺に次ぐ 2 例目であった。模写作業は 3 ケ年にもおよび、巻頭写真に掲載した前室左・右側壁、玄室右側壁の 3 ケ所の貴重な現状模写絵が完成した。また、日下氏はガランドヤ 1 号墳奥壁画にも興味を示し、委嘱事業とは別に個人的な作業として昭和 50 年に同 1 号墳奥壁の模写も行っている。こうした一連の作業のなかで日下氏は、穴観音古墳の前室左側壁に描かれている陰刻の船に注視し入念な模写を行い、このことを当時の地元紙は大きく取上げ話題となることとなり、両古墳の模写完成の昭和 50 年には記念事業として模写絵の展示や講演会が行なわれ市民の周知するところとなった。

### 5. 確認調査の実施

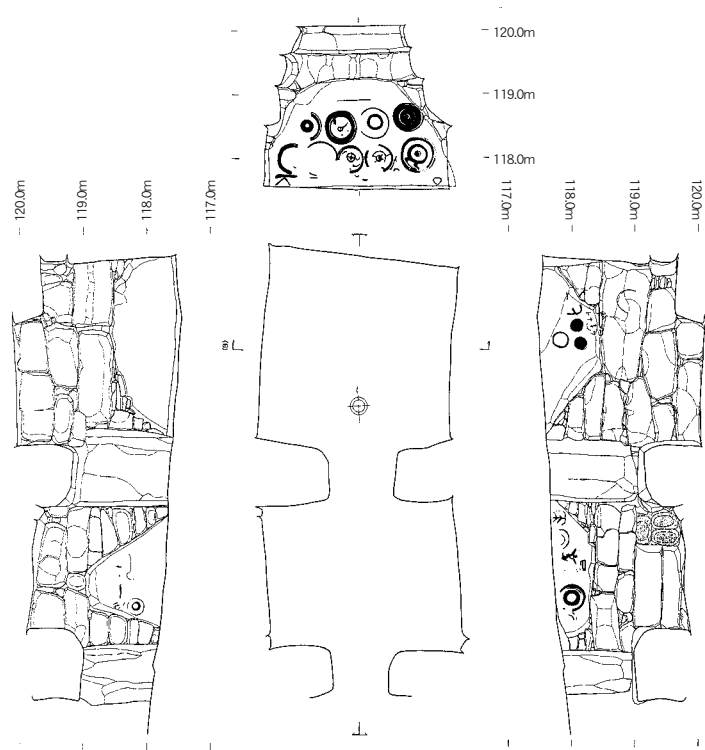
時を同じくした昭和 50 年には文化庁から「装飾古墳保護管理の取扱いについて」と題した装飾古墳の公開の有無や写真撮影の取扱いについての基本方針が出されたが、穴観音古墳については外柵等の補修といった管理は行ってはきたものの、本格的な保存目的の調査や保存施設の設置にまでは至らなかった。平成 5 年には大分県教育委員会が県内の装飾古墳を対象に 2 ケ年の基礎調査を実施し、平成 6 年 1 月には穴観音古墳の確認調査が行われた。ここでは石室内部や壁画の測量、写真撮影に加え周溝確認のトレンチ調査が実施されたが、周溝は確認できず、報告では将来の指定範囲の見直し<sup>註4</sup>が指摘された。その後、平成 8 年に古墳北側、平成 9 年に同南側、平成 12 年には同東側と相次ぐ住宅建設に伴う試掘・発掘調査が実施され、古墳隣接地にまで宅地開発の波が押し寄せてきた。すでに古墳のすぐ北には住宅団地が建設されているなど、指定範囲の見直しは急務な課題となっていた。こうしたことを踏まえて市教委は、その対応策を検討する資料目的に平成 13 年度に古墳の周溝確認調査を実施した。調査では全てのトレンチにおいて周溝を検出し、その成果をもとにこの古墳の周溝がほぼ円形に 1 重巡り、その規模は径約 25 m と推定した。しかしながら、調査での周溝復元では古墳入口付近での周溝のあり方がはっきりとしないことから、再度不自然であった古墳前面の周溝確認を行うべく、今回補足調査として 2 次調査を実施することとなった。

註 4) 渋谷忠章他編 『大分の装飾古墳』大分県文化財調査報告書第 92 大分県教育委員会 1995 年



## (2) 穴観音古墳の概要

穴観音古墳はこれまで墳丘径約12 m、高さ4 mの円墳と考えられていた。主体部は複式構造の横穴式石室で、平面プランは玄室が長方形、前室は方形に近い。羨道部を欠く現状での規模は全長が約6.9m、玄室の長さ約3.2m、玄室の幅約3m、玄室の高さ約2.6m、前室の長さ2.4m、前室の幅約3m、前室の高さ約2mを測る。石室の壁体は最下部に大きな腰石を据え、その上部や側部に切り石を持ち送りながら積み上げ、隙間には割石を充填している。奥壁には大型の鏡石を据え、天井石と接するように石柵状に突出した切石を積んでいる。彩色は赤と緑を使って前室の左右側壁、玄室の奥壁と右側壁に描かれている。前室右側壁には同心円文、両手を広げた人物、船などが描かれており、同心円文は石の表面を叩き浅く窪ませ、石の下地を浮き出す敲打技法を用いて表現されている。同左側壁には大小2艘の船や同心円文などが描かれており、大小2艘の船もまた敲打技法を用いて表現されている。玄室奥壁には二色を交互に使った同心円文、三角文などが描かれている。同側壁には円文、塗りつぶした円文、飛鳥などが描かれている。これまでに石室内からの遺物出土例の報告はなされていない。現在、古墳内部の奥壁前には観音石像が並び、石室床面には土砂が堆積している。なお、史跡の範囲は第2図に示す範囲である。



第1図 穴観音古墳の石室実測図 (1/120)



第2図 穴観音古墳の文化財指定範囲地籍図 (1/1000)

### (3) 調査経過と組織

調査経過については、以下に略述する。

9月14日 所有者である野村覚氏の承諾を得る。

10月17日 所有者である野村恒太氏の承諾を得る。

11月 5日 調査予定地（1トレンチ設定予定地区）の竹林の伐採を始める。～7日

12日 トレンチを設定し、機械を使って表土剥ぎを行ない、遺構検出作業を始める。

13日 午後から2トレンチの表土剥ぎを、機械を使って行なう。～14日

17日 1・2トレンチにおいて周溝を確認する。

18日 周溝にサブトレンチを入れ、土層の確認を行なう。

19日 土層図の写真撮影、実測作業を行なう。橋口達也、馬田弘稔両氏の来訪を受ける。

20日 調査指導者である小田富士雄、後藤宗俊両先生と県文化課職員の現地指導を受ける。

21日 遺構の実測作業を行なう。

25日 写真撮影や遺物の取上げを行い、発掘器材等を撤収する。

26日 2トレンチから埋め戻しを始める。また、同日付け日教委文第2973号で埋蔵文化財発掘調査の実施についての着手報告を大分県教育委員会教育長宛提出

27日 1トレンチの埋め戻し、調査を完了する。埋蔵文化財発見届を日田警察署長に提出する。

12月11日 同日付けで教委文第12-34号通知で埋蔵物の文化財認定を受ける。

なお、発掘調査の関係者は、以下のとおりである。（職名は当時のままとしている。）

平成15・16年度（2003・2004）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴（日田市教育委員会教育長）～平成15年7月31日

諫山康雄（同 教育長）平成15年8月11日～

調査指導 小田富士雄（福岡大学教授）、後藤宗俊（別府大学教授）、渋谷忠章（大分県教育庁文化課参事）、小林昭彦（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）

調査統括 後藤 清（日田市教育委員会文化課長）

調査事務 佐藤 晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）～平成16年3月31日、高倉隆人（同文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長）平成16年4月1日～、園田恭一郎（同文化課主査）～平成16年3月31日、伊藤京子（同文化課副主幹）平成16年4月1日～、酒井 恵（同文化課主事補）～平成16年3月31日、中村邦宏（同文化課主事補）平成16年4月1日～

調査担当 土居 和幸（同文化課主査）

調査員 行時 桂子（同文化課主任）、若杉 竜太（同文化課主事）、渡邊 隆行（同文化課主事）

作業員 五反田静子・後藤 幸市・財津 利枝・財津 由太・高倉富美子・田中 昇・筒井 英治・平原 知義

来訪者 橋口 達也・馬田 弘稔（以上、九州歴史資料館）敬称略

## II. 遺跡の立地と環境

### (1) 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

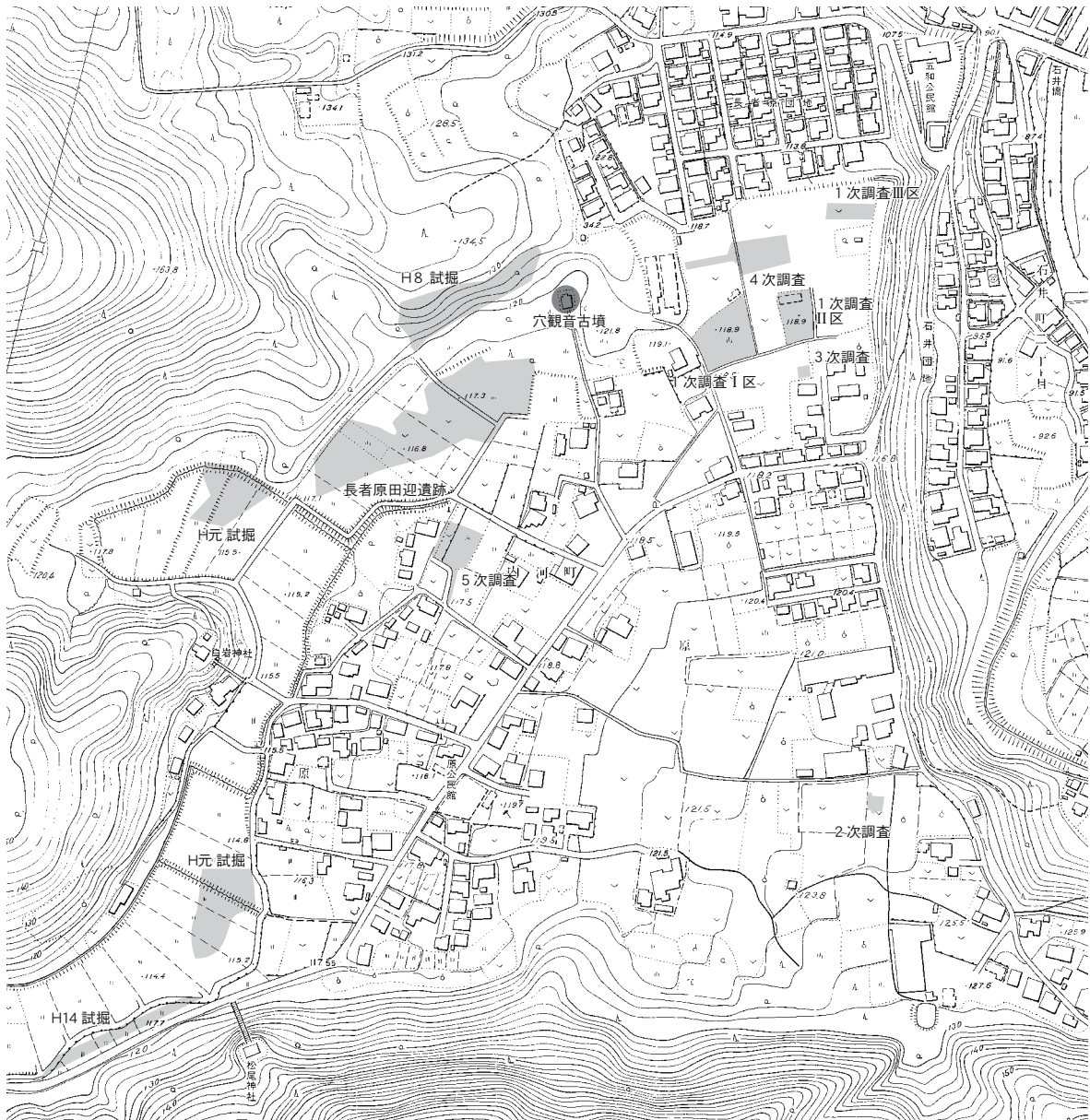
穴観音古墳のある日田市は、大分県の西部、西は福岡県との県境をなす面積約 269 平方 km、人口約 65,000 人の四方を山々に囲まれた小都市である。

九州最大河川である筑後川上流域に位置する日田は、江戸時代には幕府直轄の西国筋郡代（代官所）が置かれ、筑前福岡、筑後久留米、豊前小倉・中津、豊後府内、肥後熊本といった旧国の主要な地域と陸路で結ばれ、内陸山間部にあつては交通の要衝地として、また九州島の政治・経済・文化の中心的な役割を担ってきた。こうした内陸交通網に加え、筑後川を媒体とした通船や筏流しといった河川交通も栄え、年貢米や材木といった物資を西へ運ぶと同時に、西からの文化を強く受け入れてきた。また、この時期に成立した豆田・隈両町では御用商人が掛屋や大名御用達として活躍し金融業を発展させると、こうした商人家からは広瀬淡窓に代表される多くの文人墨客を輩出した。さらに杉の植林は日田杉の名称で一大産地として知られるようになり、その後日田下駄や家具による林業の町へと発展し、豊富な水源は遊船や鶴飼、鮎築といった伝統文化を生むなど、大分県のなかにあつては独自の地方文化を育んできた。

日田市の地形は現在の市街地にあたる標高 75 ～ 90m の沖積面が盆地底を形成し、この周囲には阿蘇 4 火砕流により形成された市内では原（はる）と呼ばれる標高約 150m 前後の溶岩台地が周辺を巡る。この外側には標高約 200 ～ 600m の耶馬溪火砕流で形成された溶岩台地が占め、その外輪にあたる市の境界域には標高 400 ～ 1,000 m 級の山々が連なり、遠方には彦山（1,199m）系、久住山（1,786m）系、阿蘇外輪山（900 ～ 1,000m）が広がっている。こうした久住山や阿蘇外輪山を源とする珍珠川と大山川は盆地東部で合流し、これに台地の合間を縫うようにして幾つもの小河川が盆地内で合わさり筑後川（三隈川）となり、筑後平野を経て有明海へと注いでいる。また内陸部特有の盆地という自然構造は、夏は暑く冬は寒いという典型的な内陸型の気候を生み出している。

こうした自然環境下にある盆地南西部の台地上に穴観音古墳は存在する。古墳の立地する通称長者原（原）台地は千田昇氏の地形分類によれば「中位段丘 1 面」と呼ばれ、阿蘇 4 火砕流堆積面の下位に比高 10 ～ 30m の崖をつくって分布する地形面で、市内の大半の台地がこれにあたる。その台地のひとつである長者原（原）台地は標高が 120 m で、台地東側は崖面となり、三方は低丘陵に囲まれている。東には串川、西には内河野川がそれぞれ北流して筑後川と合流する。台地上は主に水田や畑地などの農地として利用されているが、団地建設以後は住宅建設が増えている。

長者原（原）台地はそのほぼ全域が長者原遺跡として周知されている。この遺跡の北方にある穴観音古墳東の畑では、これまでに旧石器や縄文土器などの遺物の表面表採や、耕作中に箱式石棺が発見されたことが報告されている。また、市教委による数次の調査が実施され（第 3 図参照）、1 次調査では旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代早期の包含層や集石、弥生時代後期の竪穴住居跡など、2 次調査では古墳時代後期の竪穴住居跡、3 次調査では縄文時代の土坑や柱穴、近世の溝など、4 次調査では縄文時代早期の包含層や集石遺構、弥生時代後期前半から古墳時代はじめの環濠、古墳時代前期から中期の竪穴式石室や箱式石棺が発掘され、縄文・弥生土器をはじめ鉄器類が出土している。このほか、長者原田迎遺跡の調査では弥生・古墳時代から古代・中世期の竪穴住居跡や



第3図 穴観音古墳の位置図 (1/5000)

掘立柱建物などが発見されており、なかでも6世紀後半から7世紀前半と考えられる古墳時代の集落跡は穴観音古墳との関係を考える上で貴重な資料である。火山灰堆積が良好なことから旧石器・縄文時代の包含層が顕著に認められるという特徴のあるこの遺跡は、それ以後の弥生時代から近世までの遺構が残る市内を代表する複合遺跡でもある。

(参考文献)

- 土居和幸編 「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ』 日田市教育委員会 1986・1987年
- 千田 昇 「日田・玖珠地域の地形 - とくに台地地形について -」『日田・玖珠地域 - 自然・社会教育 -』大分大学教育学部 1992年
- 行時志郎編 「長者原田迎遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第5集 日田市教育委員会 1992年
- 原田良伸他編 『日田市の歴史と文化財』 日田市教育委員会 1996年
- 土居和幸他編 「長者原遺跡」『平成9・12年度 (1997・2000年度) 日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 1999・2001年
- 土居和幸他編 『吹上遺跡Ⅰ -3～5次調査の記録-』 日田市埋蔵文化財調査報告書第42集 日田市教育委員会 2003年

## (2) 日田盆地の古墳と横穴墓群 (第4図)

現在、日田盆地には古墳約70基と横穴墓群11が確認されている。これら墳墓の分布は、古墳は津辻古墳群(3・4)やガランドヤ古墳群(5～7)など一部を除けば大半が盆地周辺の台地や丘陵上に築かれており、横穴墓群は盆地北部の発達した台地斜面に集中して認められる傾向にある。古墳の年代については、これまでに前期の古墳の存在は確認されておらず、前期(4世紀)から中期(5世紀)に位置付けられる小迫古墳(68)や尾漕2号墳(46)が知られているほかには、姫塚古墳(14)や薬師堂山古墳(30)、有田古墳(54)などもこの時期の築造と推定されている。中期古墳には日隈古墳(16)、丸山古墳(32)、尾漕1号墳(45)、城山古墳(53)などがあり、5世紀後半の初現期にあたる横穴墓が夕田横穴墓群(33)や羽野横穴墓群(61)などで発見されている。後期の古墳にはガランドヤ1・2号墳(5・6)、法恩寺山3・4号墳(22・23)、後山古墳(28)、鳥羽塚古墳(29)、塔ノ本古墳群(47・48)、三郎丸古墳(66)、朝日天神山古墳群(71・72)などが該当し、確認されている大半の横穴墓群はこの時期に営まれているものと考えられる。市内ではつきりしている前方後円墳には護願寺1号墳(8)、城山古墳(53)、朝日天神山古墳群(71・72)の4基が存在するが、いずれの古墳も中期以降に築造されたものである。このほか、筑後川下流域に分布する装飾古墳の影響を受けた穴観音古墳(1)やガランドヤ1・2号墳(5・6)、法恩寺山3号墳(22)には装飾壁画が描かれている。以下、各古墳や横穴墓群を概観する。

倉園古墳(2)は穴観音古墳の南に隣接する古墳。消滅。津辻古墳群(3・4)は河岸段丘上にある2基の古墳。1基は消滅。ガランドヤ古墳群(5～7)は沖積地にある3基の古墳で、6C末の1号は横穴式石室の玄室奥壁に赤と緑による円文・同心円文・舟・人物・鳥などの多彩な装飾が施され、須恵器・馬具・鉄鏃・玉類などが出土している。隣接する1号より古い2号には石室の玄室奥壁に赤を下地に緑を使って同心円文、騎射像、連続山形文などの彩色が施されており、須恵器・珠文鏡・直刀・馬具などが出土している。3号も横穴式石室であるが、未調査。いずれの古墳も石室が露出している。護願寺古墳群(8～10)は丘陵地に営まれた前方後円墳1基(8)と円墳2基(9・10)で構成される。前方後円墳の1号は全長約30m。いずれも未調査。上野姥塚古墳(11)・上野カグネ塚古墳(12)は台地端部に築かれた円墳。2基とも消滅。上野横穴墓群(13)は台地斜面に数基が残る。姫塚古墳(14)は台地端部に築かれた円墳で、単室の縦穴式石室を複数もち、蛇行剣などが出土している。惣田塚古墳(15)は河岸段丘上の円墳で、横穴式石室を主体部とする。日隈古墳(16)は残丘頂部に築かれ、副葬品とされる細線式獣帯鏡が江戸時代に発見されている。千人塚古墳群(17)は3基で構成されるが、一部消滅。二ツ塚古墳(18)は丘陵に残る円墳。未調査。東寺横穴墓群(19)は台地崖面に数10基が残る。金銀錯嵌珠龍文鉄鏡や金錯鉄帯鉤などが発見されたダンワラ古墳の比定地にあたる。法恩寺山古墳群(20～26)は独立丘陵上に展開する7基の円墳で構成され、6C後半の3号(22)は径約20mの横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、袖石やまぐさ石に赤を使って円文・同心円文・馬と人物などが描かれ、須恵器や馬具が出土している。6世紀前半の4号(23)は径約13mの円墳で、主体部の横穴式石室から変形五獣鏡や馬具、直刀などの遺物が出土。『豊後国風土記』にみる日下部氏の奥津城とされる。その他の古墳は未調査。北向古墳(27)・後山古墳(28)・鳥羽塚古墳(29)はいずれも会所宮丘陵に築かれており、会所山古墳と後山古墳の主体部は横穴式石室である。薬師堂山古墳(30)は丘陵端部に築かれた径約35mの円墳で、箱式石棺を主体部とする。市内の古墳では唯一、円筒埴輪が採集されている。丸尾神社古墳(31)は薬

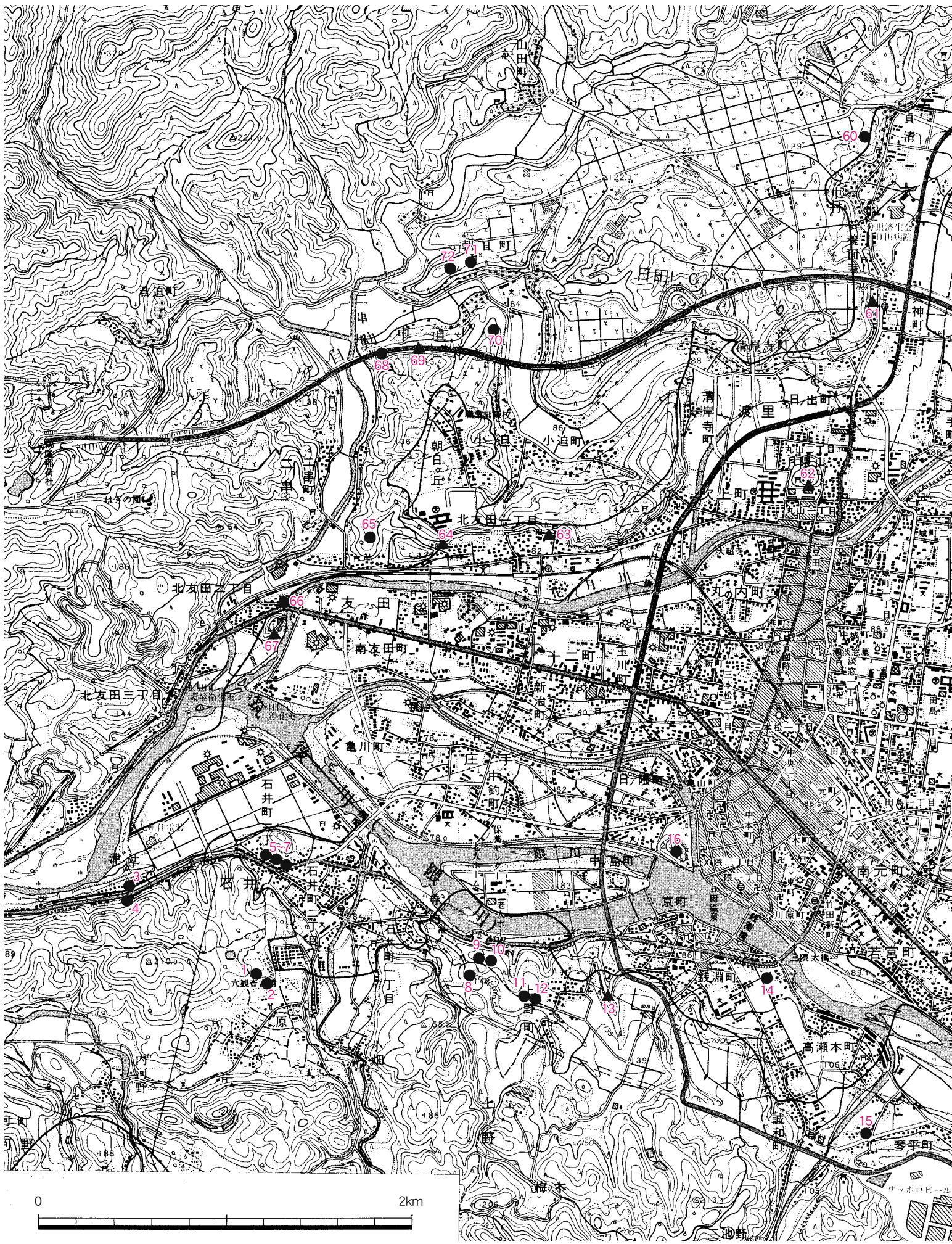
師堂山古墳に隣接する未調査の円墳。丸山古墳(32)は丘陵中腹にある径約20mの円墳で、主体部は竪穴式石室。夕田横穴墓群(33)は台地斜面あり、5C後半～8C前半まで続く43基の横穴墓が調査されている。夕田古墳(34)は台地端部に築かれた円墳で、2基の箱式石棺墓を主体部とし、鉄剣などの副葬品が出土している。佐寺横穴墓群(35)は夕田横穴墓群の東に位置し、6C後半の横穴が調査されている。中尾古墳群(36～38)とガニタ古墳群(39～41)はともに丘陵上の3基の円墳からなり、亀ノ甲古墳(42)は台地端部に築かれた円墳。いずれも未調査のため詳細は不明。有田塚ヶ原古墳群(43・44)は丘陵上にある円墳2基で構成され、1号(43)は直径約10mの規模で、主体部は横穴式石室。2号(44)は未調査。尾漕古墳群(45・46)は丘陵上の円墳2基で、5C初めの2号(46)は主体部の箱式石棺から人骨3体と素環頭太刀などの副葬品が、5C末の1号(45)は主体部の横穴式石室から須恵器や小玉が出土している。塔ノ本古墳群(47・48)は丘陵中腹に築かれた2基の円墳で、6C前半の2号は直径約12mの規模で、主体部である横穴式石室から鉄刀などが出土している。平島古墳(49)は塔ノ本古墳群の東に位置する直径約10mの円墳。未調査。平島横穴墓群(50)は小谷の最深部崖面に築かれた6C中頃～7C前半の86基からなる横穴墓で、鉄器や装身具類などの副葬品が多数出土している。クエト古墳群(51・52)は低丘陵上にある円墳2基。未調査。城山古墳(53)は台地端部にある前方部を西に向けた全長約31mの前方後円墳で、主体部は箱式石棺か竪穴式石室とみられている。未調査。有田古墳(54)は丘陵上に築造された古墳で、畑地開墾中に横穴式石室から甕付蓋の須恵器や仿製六獣鏡、仿製珠文鏡などが発見されている。石松横穴墓群(55)は独立丘陵斜面に築かれた横穴墓。近くに大行事・蕪横穴墓あり。寺坂古墳(56)は葛原台地端部に、縫ヶ迫古墳群(57・58)は台地から派生する丘陵上に築かれている円墳。葛原古墳(59)は台地上に築かれた古墳で、用松中村古墳(60)は台地端部に築かれた古墳。いずれも未調査。羽野横穴墓群(61)はこれまでに5C後半～8Cまでの横穴墓11基が調査されている。月隈横穴墓群(62)は残丘斜面に50基の横穴墓が残る。未調査。吹上横穴墓群(63)・北友田横穴墓群(64)は吹上台地斜面に築かれた横穴墓で、台地東側を吹上(63)、西側を北友田(64)と呼ぶ。これまでに数回の調査が実施されている。両横穴墓の数は市内最大で、これまでに多数の遺物が発見されている。鳥越古墳(65)は台地端部にある円墳で、三郎丸古墳(66)は横穴式石室を主体部とする6C後半頃の古墳。いずれも未調査。星隈横穴墓群(67)は残丘斜面に44基が残る。これまでに多くの遺物が出土。未調査。小迫古墳(68)は台地北部の丘陵先端に築かれた4C後半～5C前半の円墳で、主体部に粘土槨を採用し、木棺(割竹形木棺?)を安置している。珠文鏡や玉類が出土している。小迫横穴墓群(69)は5C末～7C中頃まで連続する61基が調査されている。城ノ越古墳(70)は台地端部に築かれた古墳。消滅。朝日天神山古墳群(71・72)は宮原台地に築かれた2基の前方後円墳で、東側の1号は全長約33m、2号は全長約63m。6世紀中頃の1号からは変形五獣鏡・馬具・貝製雲珠など、6世紀前半の2号からは須恵器の大型平底壺などが発見されている。2号は市内では最も規模の大きな古墳である。

(参考文献)

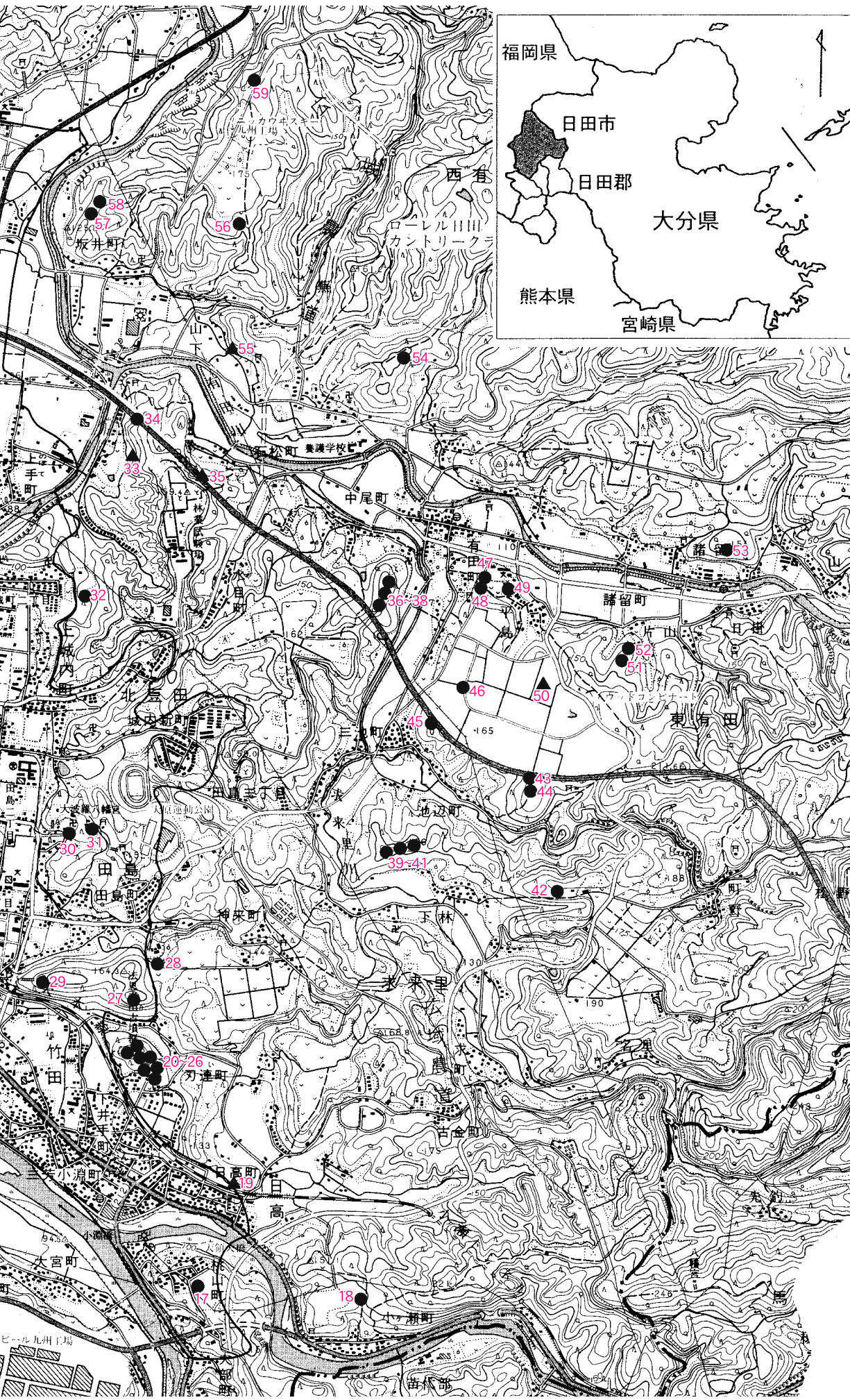
後藤宗俊「古墳時代」『日田市史』日田市 1990年

土居和幸他編『吹上遺跡I -3～5次調査の記録-』日田市埋蔵文化財調査報告書第42集 日田市教育委員会 2003年

※発掘調査報告書等の文献は、紙面の都合で割愛した。



第4図 日田盆地の古墳・横穴墓群分布図 (1/25000)



- 1 穴観音古墳
- 2 倉園古墳(消滅)
- 3 津辻1号墳
- 4 津辻2号墳
- 5 ガランドヤ1号墳(装飾古墳)
- 6 ガランドヤ2号墳(装飾古墳)
- 7 ガランドヤ3号墳
- 8 護願寺1号墳(前方後円墳)
- 9 護願寺2号墳
- 10 護願寺3号墳
- 11 上野姥塚古墳(消滅)
- 12 上野カグネ塚古墳(消滅)
- 13 上野横穴墓群
- 14 姫塚古墳
- 15 惣田塚古墳(市指定史跡)
- 16 日隈古墳
- 17 千人塚古墳群(一部消滅)
- 18 ニツ塚古墳
- 19 東寺横穴墓群(ダンワラ古墳)
- 20 法恩寺1号墳
- 21 法恩寺2号墳
- 22 法恩寺3号墳
- 23 法恩寺4号墳(装飾古墳)
- 24 法恩寺5号墳
- 25 法恩寺6号墳
- 26 法恩寺7号墳
- 27 北向古墳
- 28 後山古墳
- 29 鳥羽塚古墳
- 30 薬師堂古墳(県指定古墳)
- 31 丸尾神社古墳
- 32 丸山古墳
- 33 夕田横穴墓群
- 34 夕田古墳
- 35 佐寺横穴墓群
- 36 中尾1号墳
- 37 中尾2号墳
- 38 中尾3号墳
- 39 ガニタ1号墳
- 40 ガニタ2号墳
- 41 ガニタ3号墳
- 42 亀ノ甲古墳
- 43 有田塚ケ原1号墳
- 44 有田塚ケ原2号墳
- 45 尾漕1号墳
- 46 尾漕2号墳
- 47 塔ノ本1号墳
- 48 塔ノ本2号墳
- 49 平島古墳(市指定史跡)
- 50 平島横穴墓群
- 51 クエト1号墳
- 52 クエト2号墳
- 53 城山古墳
- 54 有田古墳
- 55 石松横穴墓群
- 56 寺坂古墳
- 57 縫ヶ原1号墳
- 58 縫ヶ原2号墳
- 59 葛原古墳
- 60 用松中村古墳
- 61 羽野横穴墓群
- 62 月隈横穴墓群
- 63 北友田横穴墓群
- 64 吹上横穴墓群
- 65 鳥越古墳
- 66 三郎丸古墳(市指定史跡)
- 67 星隈横穴墓群
- 68 小迫古墳
- 69 小迫横穴墓群
- 70 城ノ越古墳(消滅)
- 71 朝日天神山1号墳(前方後円墳)
- 72 朝日天神山2号墳(前方後円墳)



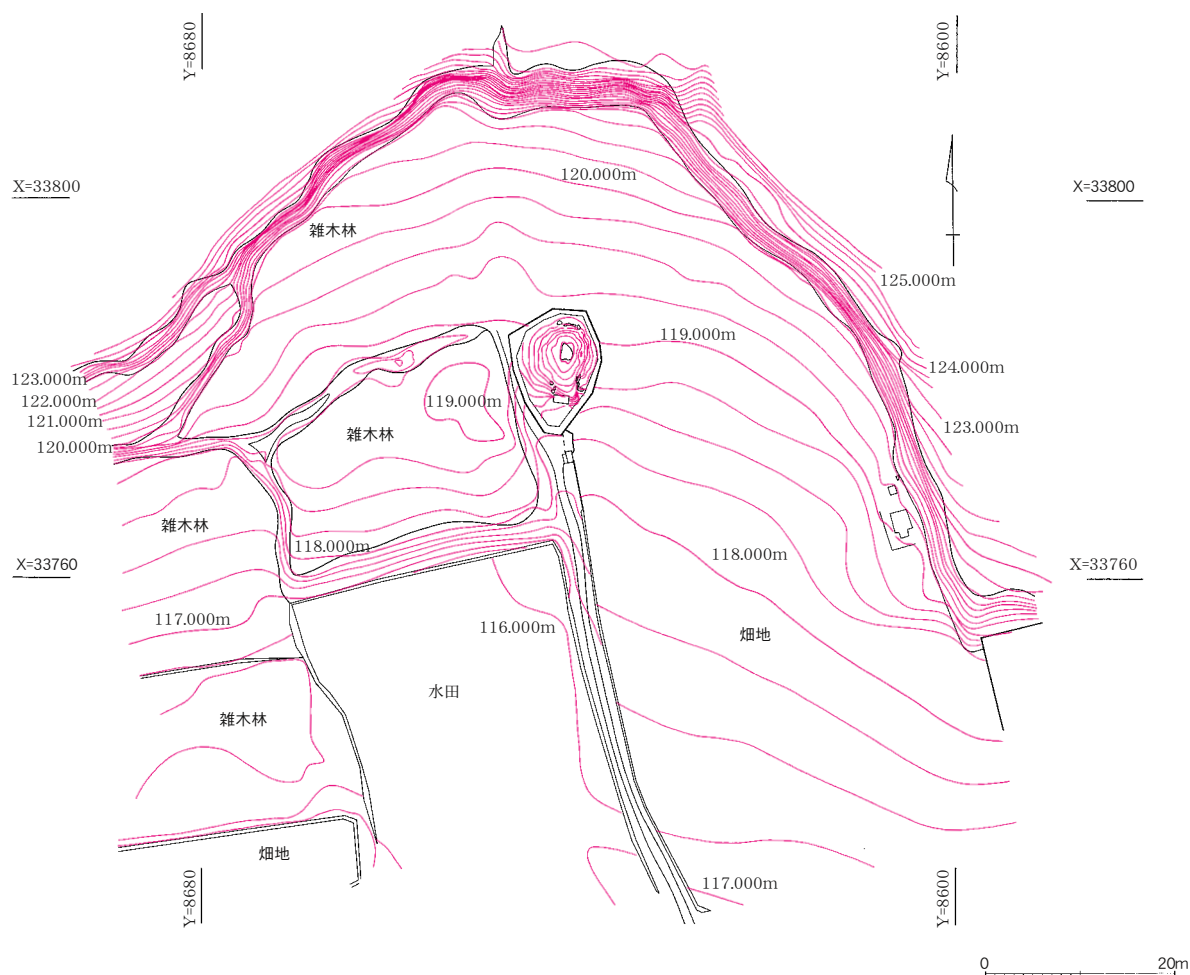
### Ⅲ. 調査の記録

#### (1) 古墳の現状 (第5図、図版1)

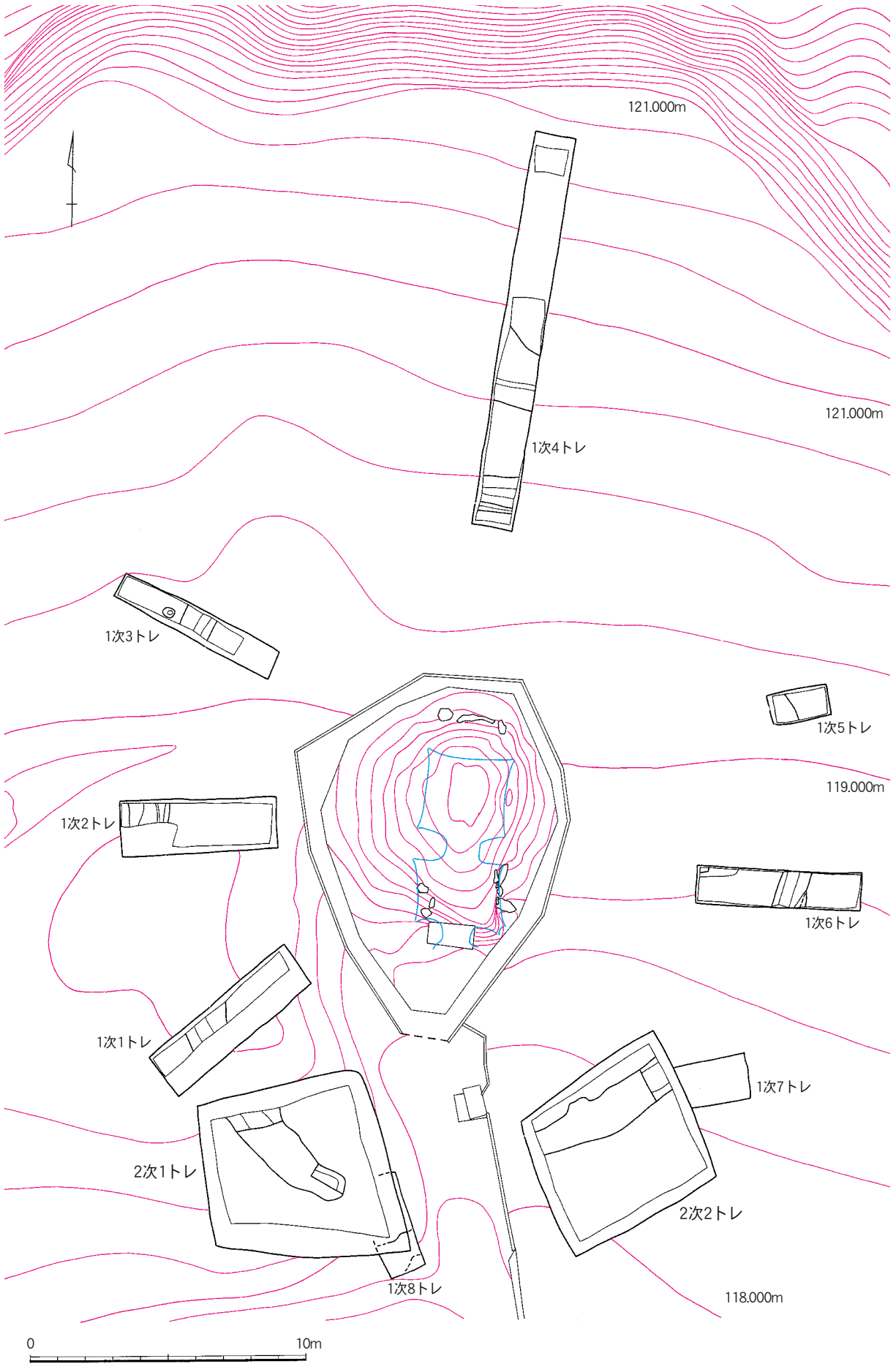
古墳は台地北部の北から南へと緩やかに傾斜する標高約190mの山裾斜面上に立地する。台地中央を走る市道から北へ向う狭い里道を通り抜けると古墳に達するが、その脇沿いには住宅が建ち並び、昔は一目でわかった古墳も遮られている。古墳の周囲は西側には雑木林、東側は畑地、正面は水田、古墳背後には5mほどの崖面が塀のように広がり、この崖面を越えると住宅団地が控えている。昭和47年の覆屋建設後は墳丘が乾燥して封土が流れ落ち、建設時にはみられなかった石室の一部が露出する状況が続いている。また、平成12年からは壁画へのカビ等の発生を防ぐために一般公開を行わない措置を講じるなど、その保護対策に努めている。

#### (2) 調査の概要 (第6図、挿入写真3)

今回の調査は1次調査で確認された周溝のうち、はっきりとしない古墳正面の周溝確認を目的に実施した。そのため、調査地点を古墳正面の里道を挟んだ両脇に限った場所に2つのトレンチを設定し、その確認に努めた。その具体的な位置は第6図に示した1次調査での1トレンチと8トレンチの間、東側は7トレンチと接するようにその西側とし、前者を2次1トレンチ、後者を2トレン



第5図 穴観音古墳周辺地形測量図 (1/800)



第6図 トレンチ配置図 (1/200)

チと呼ぶことにした。こうしたトレンチの設定や掘下げにあたっては1次調査同様に2m幅を基本としたトレンチを手作業で掘り進めようとしたが、1次調査では表土から古墳周溝検出面まで1.5mと深く作業上危険であり、さらには周溝の範囲を的確に捉えるためにはある程度の調査範囲が必要との判断からトレンチは方形とした。掘下げは遺構への影響の少ないトレンチの上面までは機械を使って表土を除去し、その後は作業員による人力での掘下げを行った。



写真3) 調査風景

また、検出した遺構については、掘下げは極力行わずに面的な把握にとどめることを前提とし、土層の堆積確認等を行うのに必要なサブトレンチのみの最小限範囲にとどめ、古墳とは異なる時期と思われる遺構や包含層については検出・確認とした。結果、2つのトレンチにおいて周溝を確認することができた。測量についてはトレンチの範囲は1次調査での基準点を中心として1次調査での測量図と合成し、遺構や出土遺物、土層などの各個別実測図は各トレンチごとに2m単位の方眼を組んで縮尺20分の1の図面に記録を行い、写真はデジカメとカラーリバーサルを用いて撮影記録とした。調査終了後には遺構上面に真砂土をいれて保護し、埋め戻しを行った。

なお、2次調査の調査面積は1トレンチが40.2㎡、2トレンチが32.9㎡で、両トレンチ合わせて73.1㎡である。

### (3) 基本土層 (第8・9・15図、図版4)

前述したように古墳の位置するこの台地は火山灰堆積が良好で、長者原遺跡1次調査ではその堆積状況の観察が行われている。今回の調査においても両トレンチのサブトレンチで共通した火山灰の基本堆積土を観察しえたので報告する。基本堆積土層は3層確認した。

I層は黄褐色粘質土。粘り気が強く、粒子が細かい。縄文時代の遺物を包含する。

II層はI層下に堆積する茶褐色土層。粘り気は少なく、粒子が細かい。

III層はII層下に堆積する褐色粘質土層。やや粘り気があり、粒子は粗い。両トレンチの周溝はこの層まで掘り込まれている。

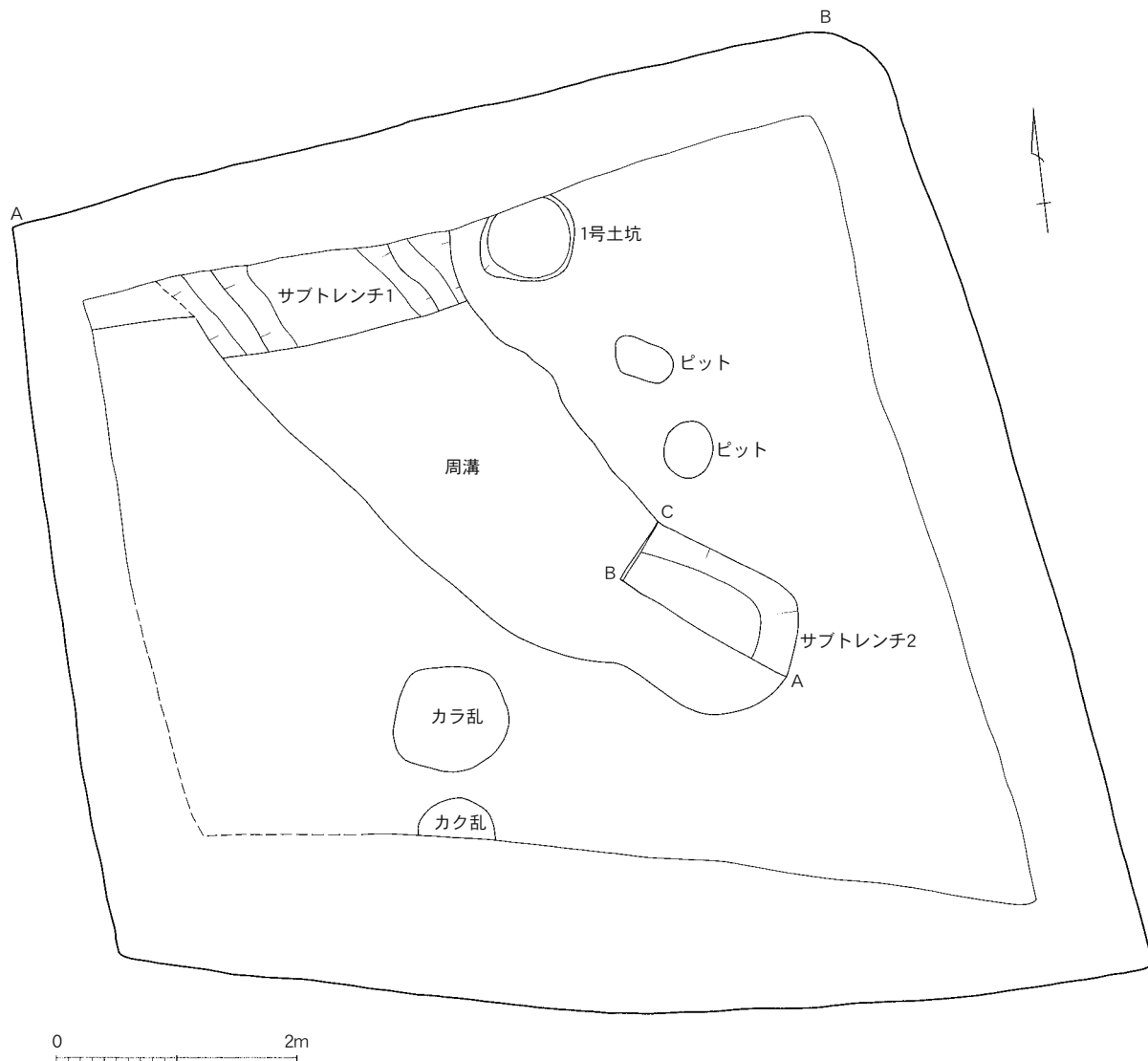
これらの基本堆積土層は長者原遺跡1次調査の基本土層のI層がIII層(黄褐色土層)、II層がIV層(黒色土層)、III層がV層(明黄褐色土層)にそれぞれ対応するもので、I層は縄文時代の包含層、IIあるいはIII層は旧石器時代の包含層の可能性がある。

### (4) 1トレンチの調査 (第7～10図、図版2～4)

このトレンチ設定にあたっては1次調査8トレンチで検出した周溝(あるいは墓道)と考えられる溝の精査の必要性から、1次調査8トレンチに重複させて確認作業を行ったところ、前回検出した周溝とは別の位置で新たに周溝が検出された。このことにより、調査中には前回確認された溝の追跡も検討したが、南側には水田、東側には道が存在することからトレンチの拡張が容易でないため断念することとし、調査は新たな周溝の記録作業を主眼に進めることにした。

トレンチで検出した遺構は周溝1条、土坑1、ピット2である。このほか、地山である基本堆積土I層中には縄文時代の土器や台石などが含まれていた。調査では、周溝については検出後にサブトレンチ2ヶ所を設定して掘下げ、土層の確認や遺物の出土状況、周溝底面の確認を行った。また、土坑については検出段階で古墳に関係すると考えられる須恵器や土師器が出土したので、確認のために掘下げを行った。他のピット2つについては埋土の様子から古墳と時期を異にする遺構と判断して検出のみにとどめ、縄文時代の包含層(基本堆積土I層)についても同様に掘下げは行っていない。現在の表土面から遺構検出面までの深さは1.1～2.1mで、表土面から周溝底面までの深さは約2.5mである。

次に、トレンチ内の土層堆積状況は第8図に示すとおりである。1～3層は昭和期に行われたトレンチ南側を水田化する際に盛られた客土で、南に向うほどその堆積の厚みは増している。4層は1～3層以前の旧地表層と考えられる。5層は黒色土層。1次調査でも各トレンチで確認されている腐植土層で、ここからは13～14世紀頃の遺物が出土しており、少なくともこの時期以降の堆積層である。6層は黒味を、7層は灰色を帯びた土層で、墳丘側から周溝に向って緩やかに傾斜す

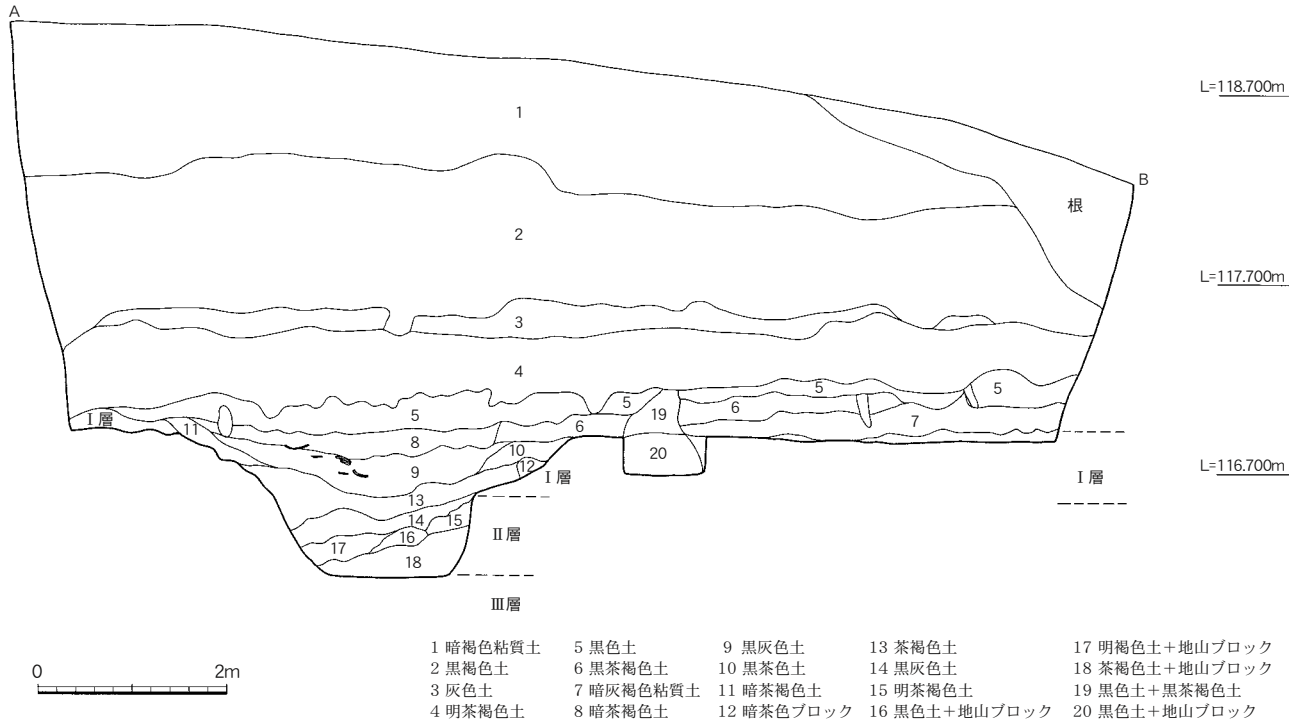


第7図 1トレンチ遺構配置図(1/60)

るように堆積している。この両者の下位には基本堆積土Ⅰ層、すなわち地山がみられることからして、6層は墳丘の流出土、7層は古墳築造時の旧表土と推定される。この2つの層は1次調査1トレンチの土層と対比した場合、6層は1次1トレンチの25層に、7層は1次1トレンチの26層に対応すると考えられる。8～18層は周溝埋土である。ここでは版築層は確認されなかった。

**周溝**（第8～11図、図版2～4）

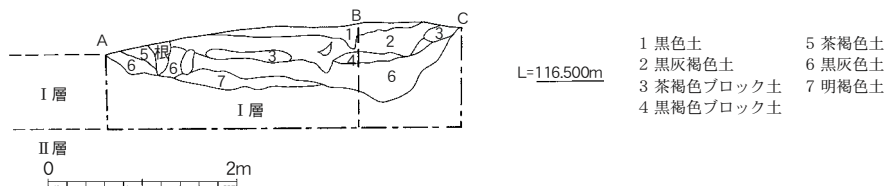
周溝は調査区の北東側から南西側へと逆「ノ」字状に延びており、その場所からして1次調査1トレンチへと続く。いっぽう南西側で途切れる周溝端部はやや丸みを持つ平面形をなし、縦断面



第8図 1トレンチ北側壁 土層実測図 (1/40)

第1表 1トレンチ土層対応表

	黒色土	墳丘流土	旧地表面	周溝埋土	地山
1次調査1トレンチ	12層	26層	25層	27～44層	45層
1次調査8トレンチ	8層	9層	10層		
2次調査1トレンチ	5層	6層	17層	7～16層	18層

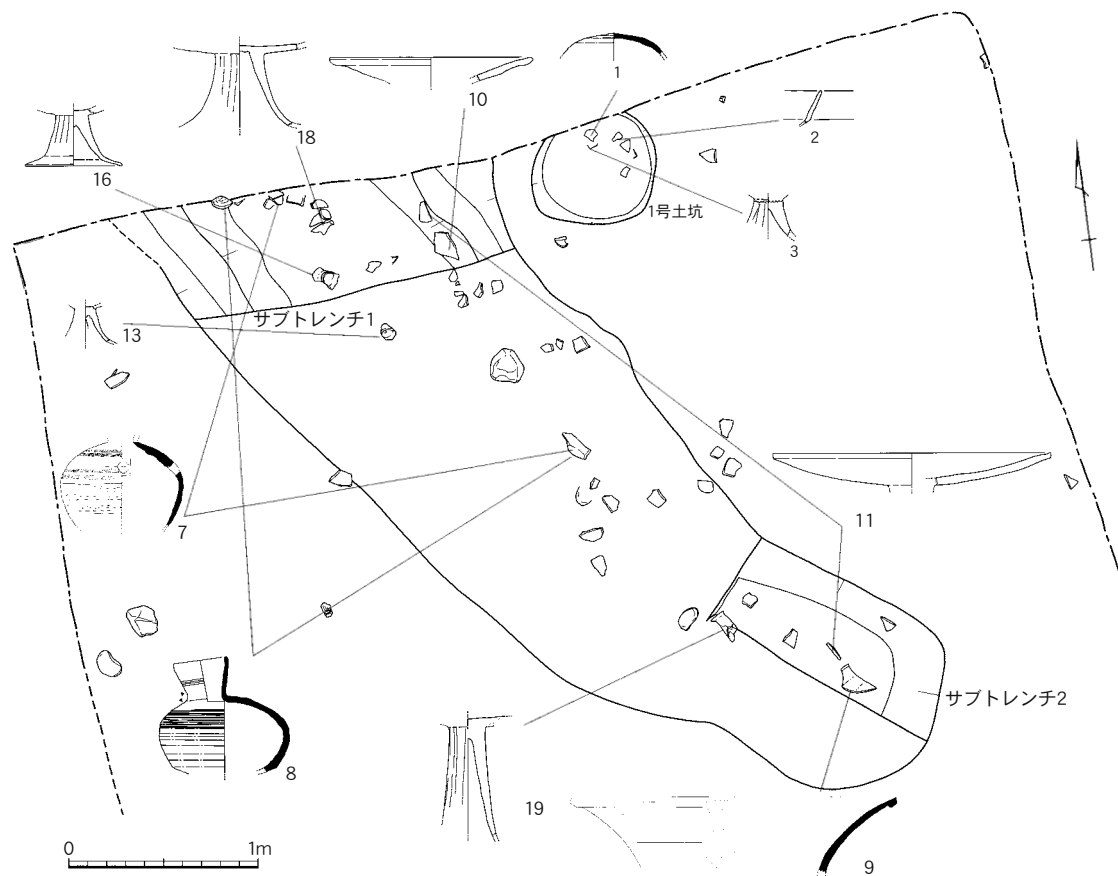


第9図 1トレンチ周溝サブトレンチ2土層実測図 (1/40)

は第9図のとおり端部に向って緩やかに傾斜し途切れる。周溝はこの場所で途切れ、東側は墓道にあたるものと判断される。検出面での周溝の最大幅は約160 cm、底面幅は58 cm、サブトレンチで確認できた深さは約75 cmを測り、断面は逆台形をなしている。その端部の横断面も状況からして浅い逆台形をなすと考えられる。周溝の検出面でのレベルは周溝の内側が116,920 m、外側が116,870 m、周溝底面が116,100 m、端部面では116,650 mを測る。

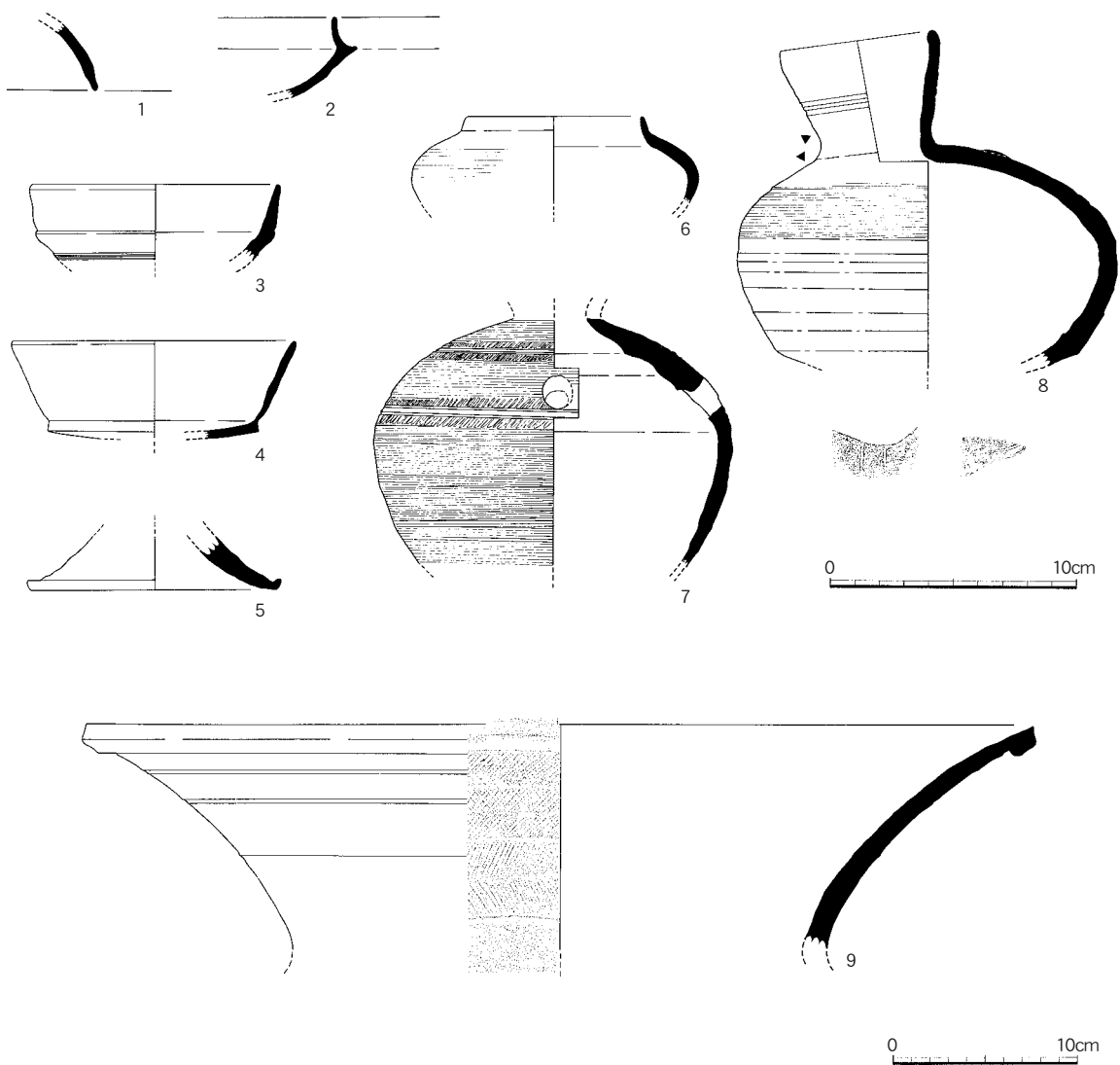
周溝の土層堆積状況についてはサブトレンチ1では第8図に示すように11の堆積土層(8~18層)を観察し得た。これらの埋没土は大きく2つに分けられ、上層(9~11層)は土色が黒味を帯び、レンズ状堆積を基本としている。下層(12~18層)は地山堆積土(Ⅲ層)をブロック状に多く含み、墳丘側からの堆積状況を示している。このような土層の堆積のあり方は1次調査1トレンチでのあり方と同様である。遺物は8・9層中に多く認められ、その下位の12層にまでおよんでいる。また、周溝端部での土層堆積状況は7つの土層堆積が観察できた。1~6層は全体的に黒味を帯びており、下位の7層には黒味が認められず、堆積の様子から墳丘側からの流れ込みと考えられる。

遺物は検出した周溝上面から出土しており、その分布範囲は周溝端部にまでおよび、出土量は1次調査の各トレンチに比べると多いといえる。取上げを行った遺物の器種には須恵器環、高坏、埴、甗、横瓶、甕など、土師器坏や高坏などがある。



※遺物実測図は9は1/12、その他は1/9

第10図 1トレンチ周溝・1号土坑実測図 (1/40)



第11図 1トレンチ周溝出土土器実測図① (1/3・1/4)

**出土遺物** (第11・12図、図版8・9)

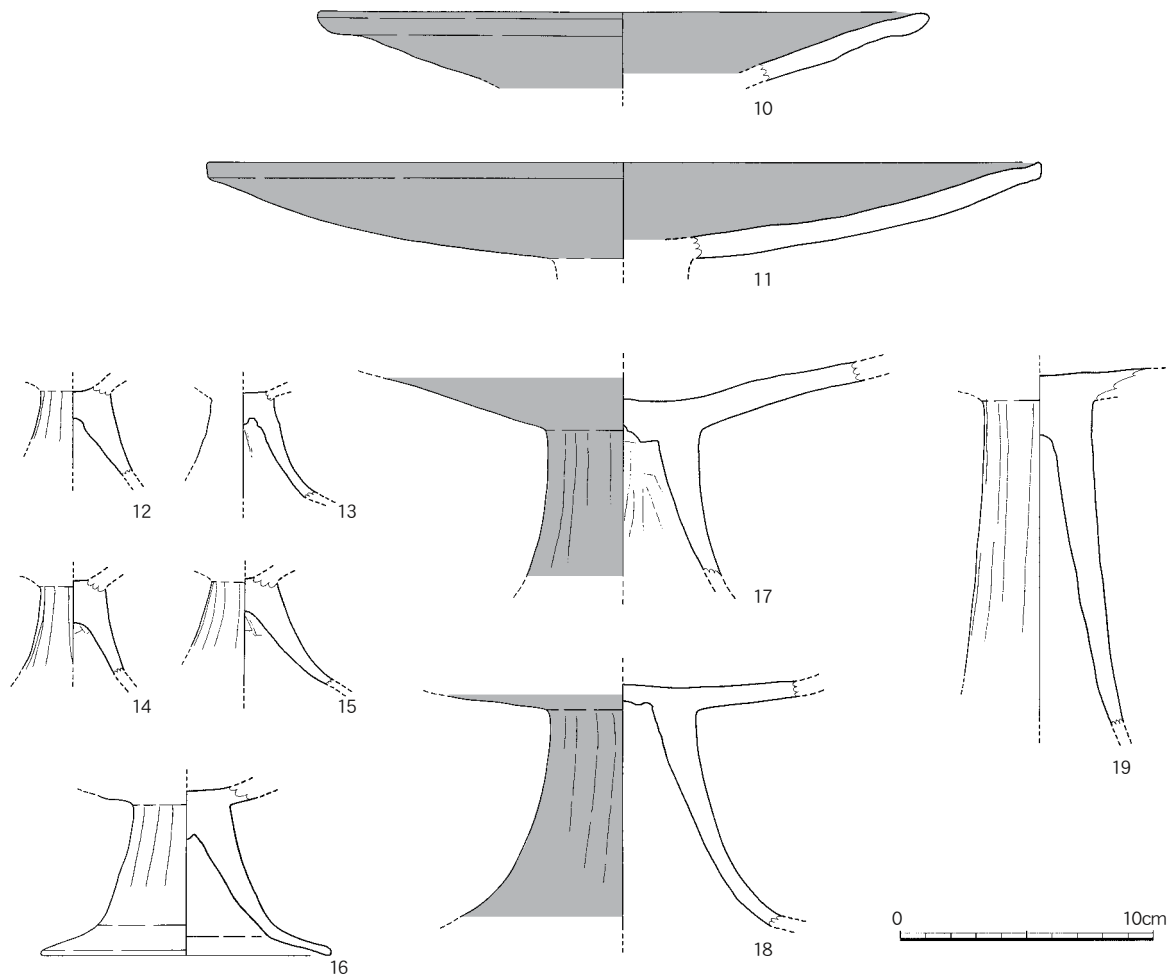
主な遺物を掲載するが、掲載遺物のうち出土場所のはっきりしている土器や接合関係にある遺物については第10図に示した。

**須恵器** (第11図1～9、図版8)

坏(1～2) 1は坏蓋で、身受けの返りをもたない。端部は細くさせ丸く仕上げる。2は坏身で、蓋受けの返りが内傾して短く立ち上がる。1はサブトレンチ1出土。2はトレンチ一括品。

高坏(3～5) 3・4とも脚部を欠く。3は口縁部の開きは小さく、坏部外面下半に一条の沈線を巡らせる。復元口径は10cmを測る。4は口縁部と坏底部の境が明瞭でシャープな仕上げが施されている。口縁部は薄く、外傾しながら立ち上がる。復元口径11.6cmを測る。5は脚部上半部から上を欠く。大きく開く脚の端部は外側に跳ね上げる。復元底径は10cmを測る。3は8層中出土。4はサブトレンチ1出土。5はトレンチ一括品。

埴(6) 胴部下半を欠く。口縁部は内傾しながら、短く立ち上がる。胴部最大径は体部上半にある。



第12図 1トレンチ周溝出土土器実測図② (1/3)

復元口径は 7.2 cm、胴部最大径は 11.7 cmを測る。トレンチ一括品。

甕(7) 口縁部と体部下位を欠く。肩部附近に4ヶ所の列点文が巡り、体部上位に穿孔が施されている。体部最大径は 14.7 cmを測る。8・9層中より出土。

平瓶(8) 口縁部と体部の一部を欠く。体部は扁球形をなし、肩はやや張り気味となる。肩部にはカキ目、その下位から底部付近までは回転ヘラケズリで仕上げる。肩部には浮文、口縁部と頸部にはそれぞれヘラ記号を付す。8・9層から出土しており、6の甕と同一の位置から出土している。

甕(9) 口縁部が長く外反し、端部は肥厚する。外面には2本一組の凹線で3段に区画し、上位は斜行線文、中位は斜格子目線文、下位は上に右下がりの斜行線文、下に左下がりの斜行線文を施す。復元口径は 51.4 cmを測る。サブトレンチ2の1層から出土。

**土師器** (第12図10、図版8・9)

高坏(10~19) 10・11は坏部下半と脚部を欠く。10は口縁部が大きく開き、口縁端部は丸く仕上げる。内外面ともに赤彩されている。復元口径は 24 cmを測る。17の脚部と同一個体の可能性がある。11は口縁部が緩やかに内湾しながら長くのび、大きく外方に開く。端部はわずかに上方へ立ち上がる。内外面ともに赤彩されている。復元口径は 33.2 cmを測る。18の脚部と同一



個体の可能性がある。12～19は脚部で、小型のもの（12～15）、中型のもの（16）、大型のもの（18～19）と3つのタイプが認められる。12～15は坏部と脚部下半を欠く。12～14は、外面は縦方向の削りが、内面は横方向の削りの後ナデ調整が施されており、内面の柱状部と裾部の境にはヘラ削りによる稜線が残る。15もこれらと同様であろうが磨耗が著しくはっきりしない。16は坏部を欠く。脚部は短い幅広で、大きく開いて、端部は丸く仕上げる。17～19は坏部と脚部の下位を欠く。17・18は坏部の底部がほぼ平坦で大きく開きそうである。脚部も外反する。坏部の内外面と脚部外面に赤彩されている。19は他に比べて脚部が長い。外面は縦方向の削りが、内面は横方向の削りが施されている。10・16はサブトレンチ1の8層出土。11はサブトレンチ1の8層とサブトレンチ2の1層から出土した破片が接合。12・14・15はトレンチ出土。13・17は8層から出土。19はサブトレンチ2の1層から出土。

### 1号土坑（第10図）

周溝内側で検出した土坑で、検出段階で須恵器や土師器の出土がみられたので、古墳に関する遺構と考え掘下げた。土層断面でみるとこの土坑の上部は根による攪乱のため掘り込み位置がはっきりとしないが、遺構検出時での確認の様子からすれば6層中からの掘り込みである。土坑の平面形はほぼ円形をなし、径50cm、深さ約46cm。埋土は黒色土に地山のブロック層が混入する。この土坑は祭祀に関連するものであろうか。

### 出土遺物（第13図、図版9）

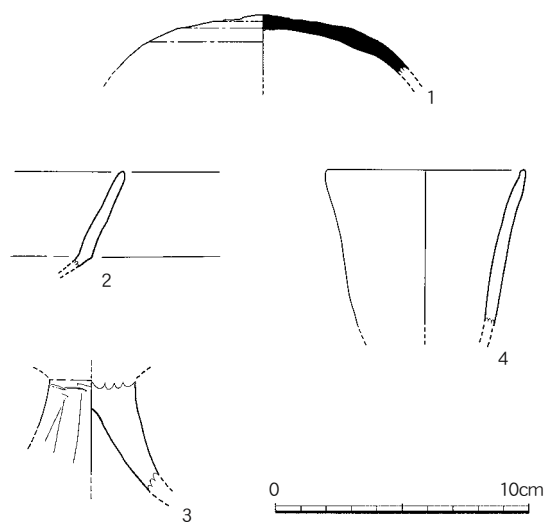
#### 須恵器（第13図1、図版9）

坏（1） 坏蓋である。外面にはヘラ削り痕を残す。

#### 土師器（第13図2～4、図版9）

高坏（2・3） 2は坏部の口縁で、外傾し直線的に立ち上がる。3は脚部で、外面は縦方向の削り痕跡を残す。

長頸壺（4） 口縁部のみで体部を欠く。口縁部はほぼ直線的に外傾し、端部は丸く仕上げる。外面に丹塗り。復元口径は7.8cmを測る。

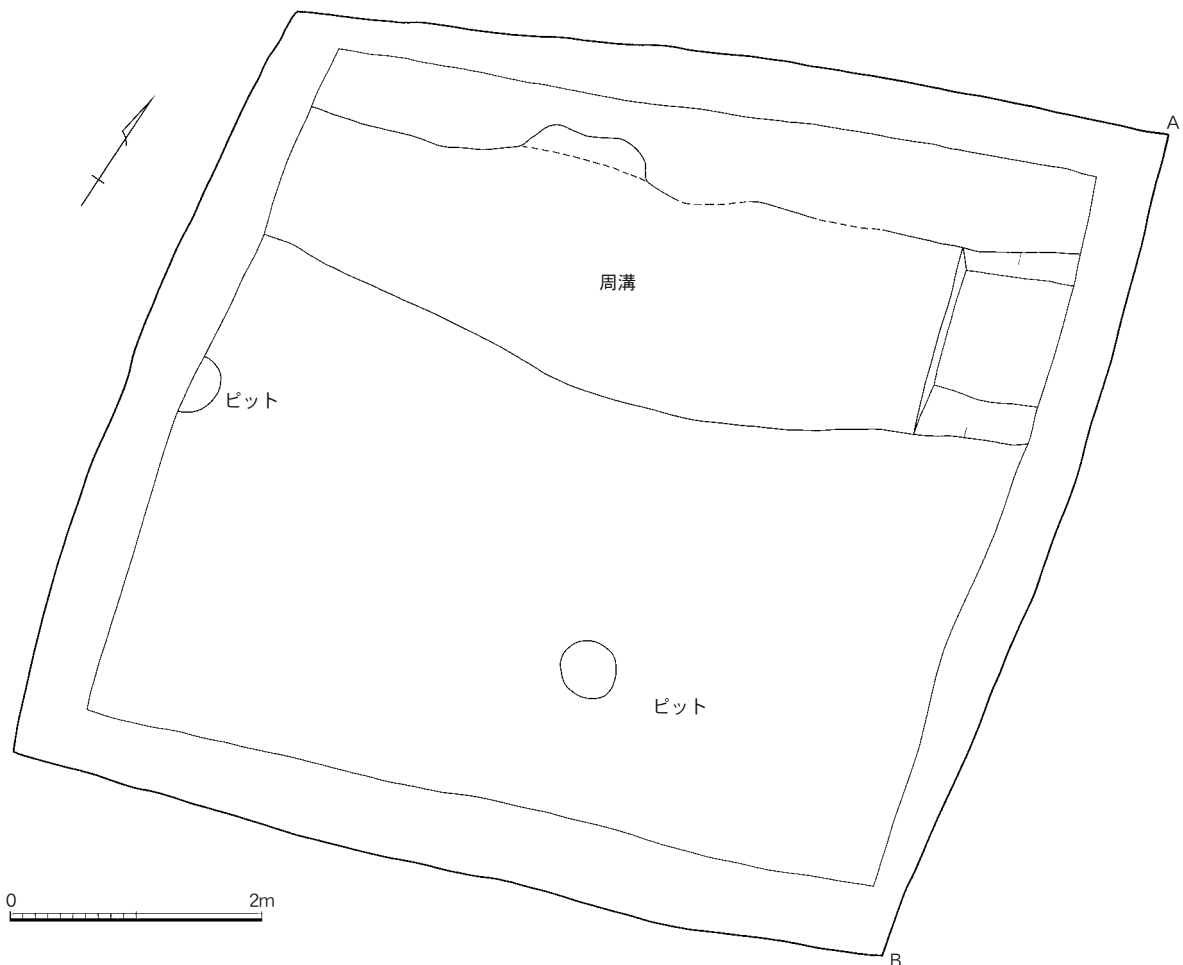


第13図 1トレンチ1号土坑出土土器実測図（1/3）

(5) 2トレンチの調査 (第14図、図版5)

このトレンチは1次調査8トレンチで検出した周溝の追跡確認を目的に、1次調査8トレンチと重なる格好で設定して、その確認作業を行った。結果、前回検出した周溝は南側へと伸びると想定していた方向とは異なる西向きに走ることが判明した。検出した周溝は今回のトレンチの西側をさらにトレンチ外へと伸びていることから周溝端部確認のため追跡も考えたが、トレンチを西に拡張するには説明板の撤去や道の掘削といった問題が生じることとなるのでトレンチ範囲内での周溝の記録作業にとどめた。

2トレンチで検出した遺構は、溝(周溝)1条、ピット2である。このほか、1トレンチ同様に地山である基本堆積土I層中から縄文時代の遺物が出土している。これらの検出遺構のうち、周溝についてはその東西位置にサブトレンチを各1ヶ所ずつ設定して、土層の堆積状況や周溝底面の確認を行う予定であったが、周溝東側には検出段階から多くの遺物が出土し、掘下げを行うと時間と経費が予想以上に必要と判断して今回は設定を見送り、比較的遺物の少ない周溝西側1ヶ所のみとして掘下げを行った。ピットについては埋土の様子が古墳時代以降の時期に該当すると判断し、検出のみとした。



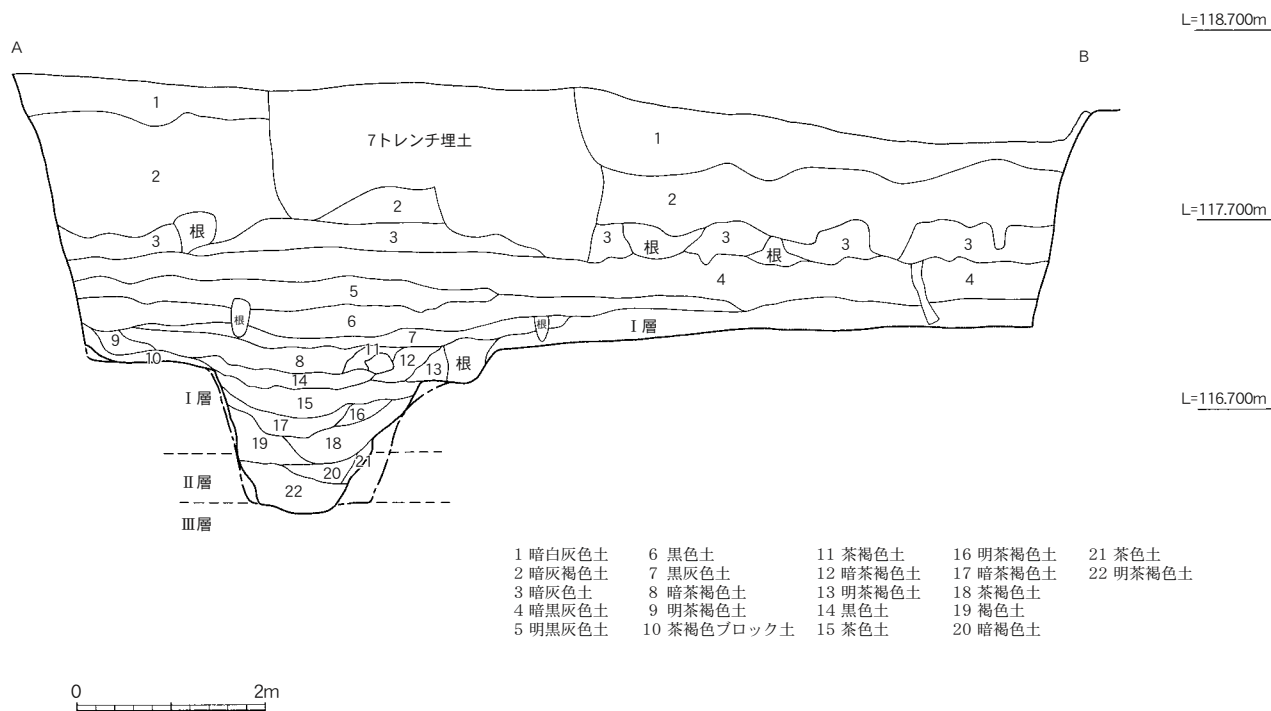
第14図 2トレンチ遺構配置図 (1/60)

次に、トレンチでの土層堆積状況は第15図に示すとおりである。1・2層は現在の畑地層である。その下位には4～7層といった黒味を帯びた腐食土などが数枚堆積しており、その中でも6・7層は黒味が強く、6層は2次調査1トレンチの5層に対応するものと考えられる。8～22層は周溝の埋土である。ここでは古墳に伴うはっきりとした旧地表面を確認することはできなかった。周溝を全掘したわけではないが、これら堆積土のなかでも6～8層を中心に多くの遺物が出土している。現在の表土面から遺構検出面までの深さは1.0～1.45mで、表土面からサブトレンチで確認した周溝底面までの深さは2.3mである。

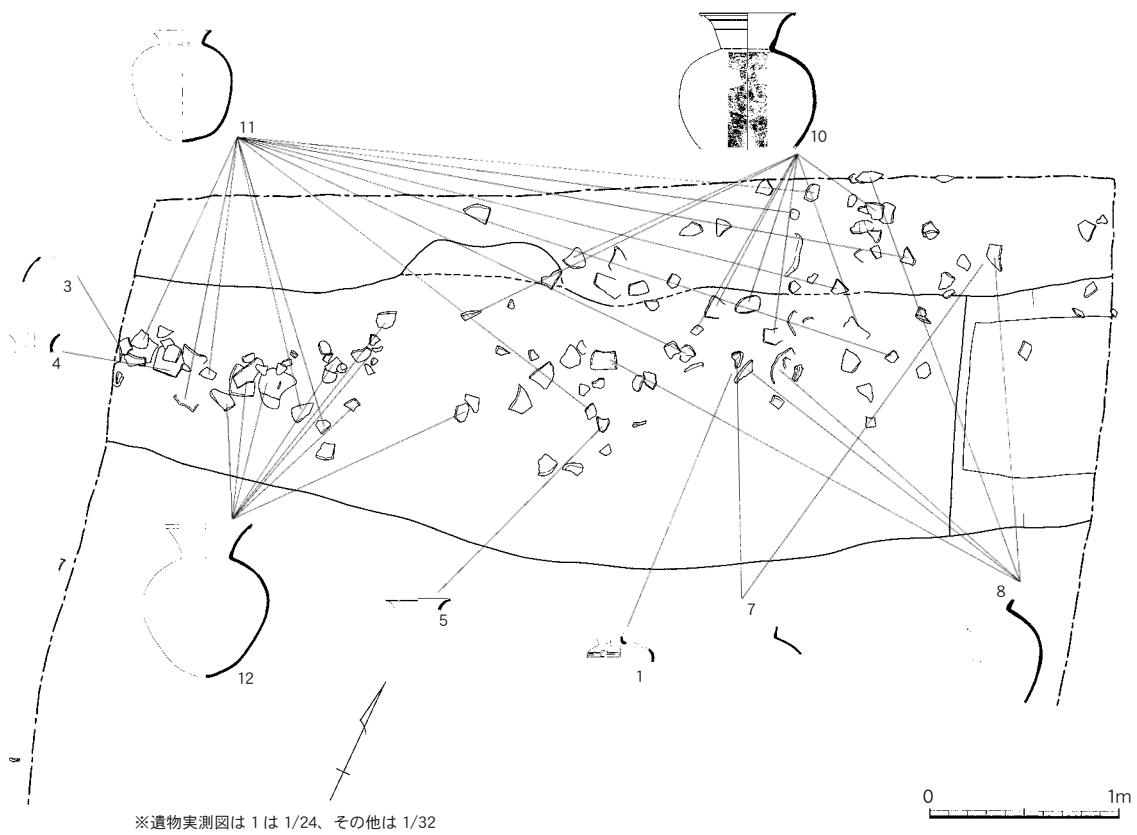
**周溝** (第15・16図、図版5～7)

周溝は調査区の東側から西側へとほぼ直線的に延びており、1次調査7トレンチから続くものである。検出面での周溝の規模は幅が約90～150cm、サブトレンチ1での底面幅が84cm、サブトレンチで確認できた深さは88cmを測り、断面形は逆台形をなす。周溝の検出面でのレベルは東側の内側が116,980m、外側が117,200m、西側の内・外側とも116,895mを測り、検出面でのレベルは東側から西側へとほぼ水平に近い勾配となっている。サブトレンチ1で確認し得た周溝底面のレベルは116,150mを測る。

周溝の土層堆積状況はサブトレンチ1では第16図に示すように15の土層を観察した。これらの埋没土は14層の黒色土を中心に大きく2つに分けられ、上層(8～13層)は周溝の埋没後の堆積層で、その下位層(15～22層)は交互堆積が顕著な周溝の埋没土である。

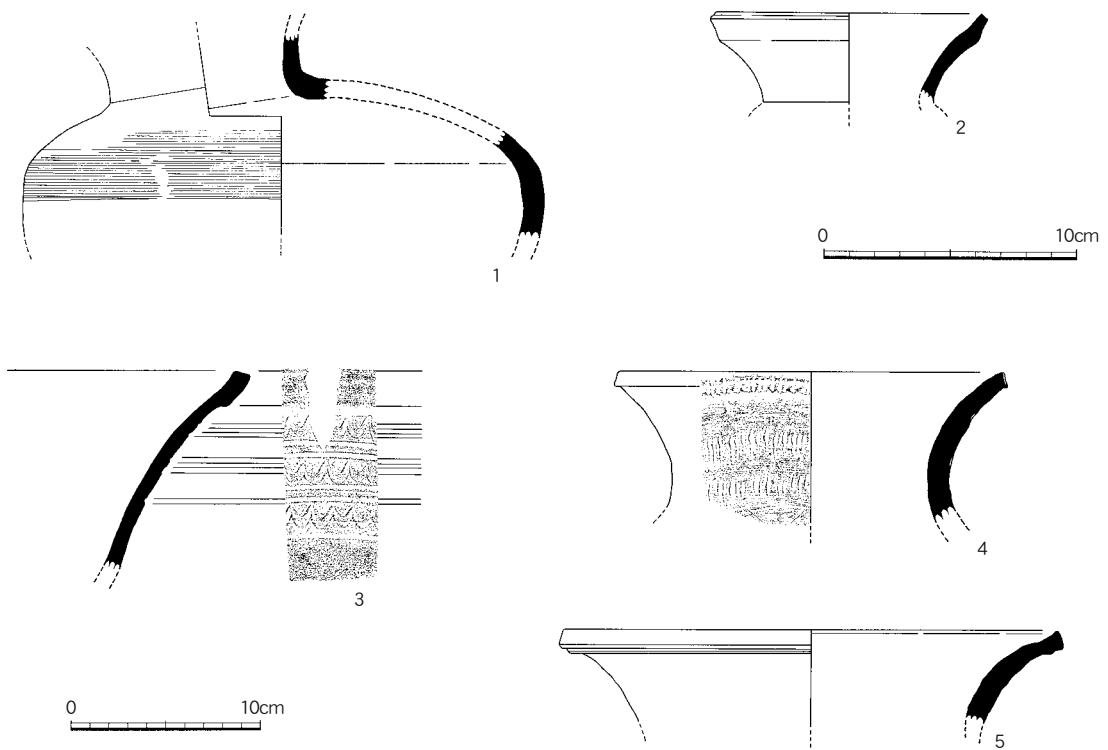


第15図 2トレンチ東側壁土層実測図 (1/40)



※遺物実測図は1は1/24、その他は1/32

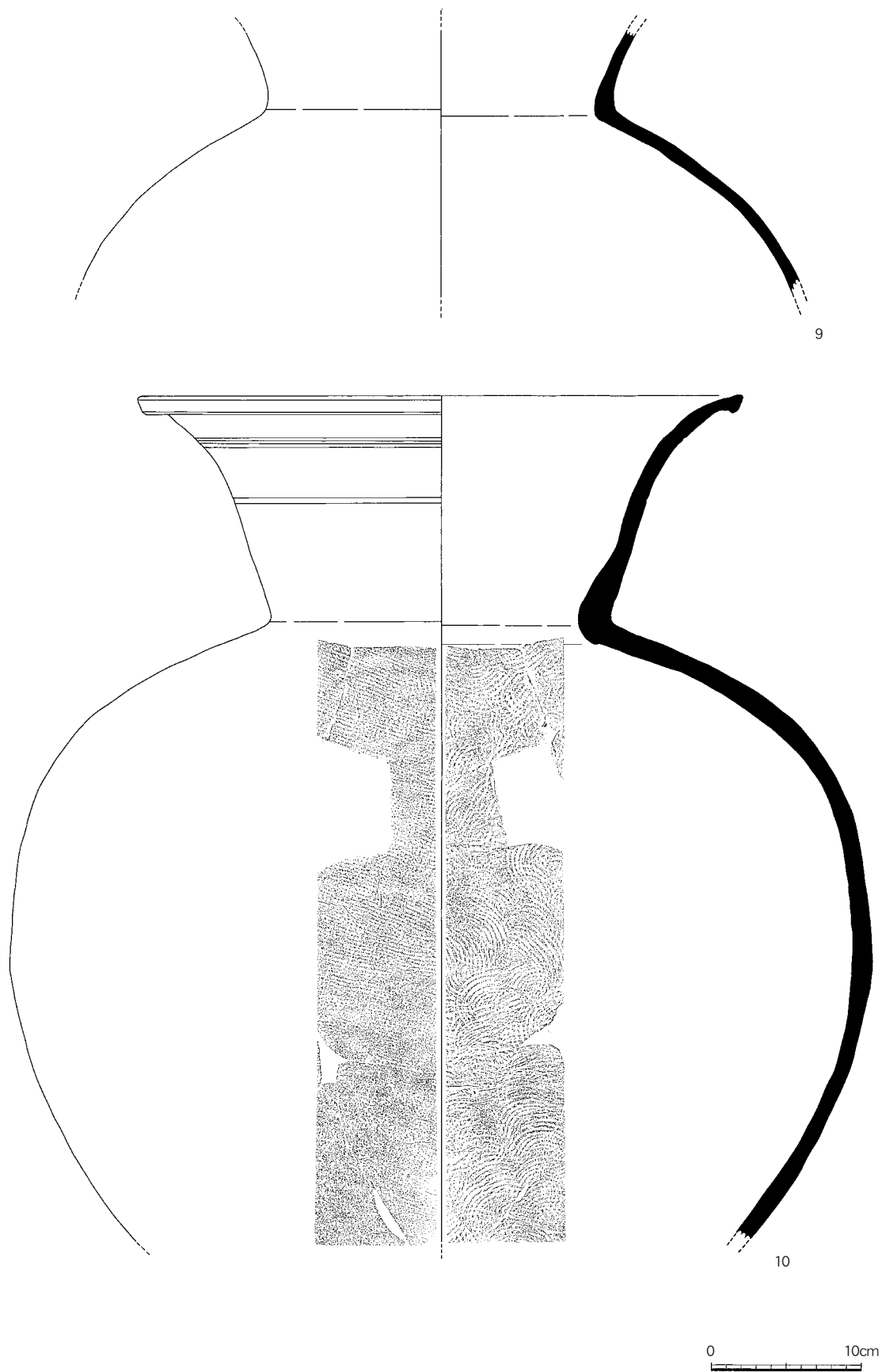
第16図 2トレンチ周溝実測図 (1/40)



第17図 2トレンチ周溝出土土器実測図① (1/3・1/4)



第18図 2トレンチ周溝出土土器実測図② (1/4)



第19図 2トレンチ周溝出土土器実測図③ (1/4)

遺物は検出した周溝から多く出土している。とくにその出土状況や接合関係からみて大半の遺物は前庭部からの流れ込みで、周溝端部へとさらに広がりそうである。取上げを行った遺物には完形品は認められないもの、全掘すれば完形品となり得る土器も多くあると予想される。遺物の器種には須恵器高坏、横瓶、平瓶、甕など、土師器坏、高坏などがあり、このトレンチでの結果を見る限りでは須恵器甕の出土量が目立つ。

**出土遺物** (第 17 図、図版 9・10)

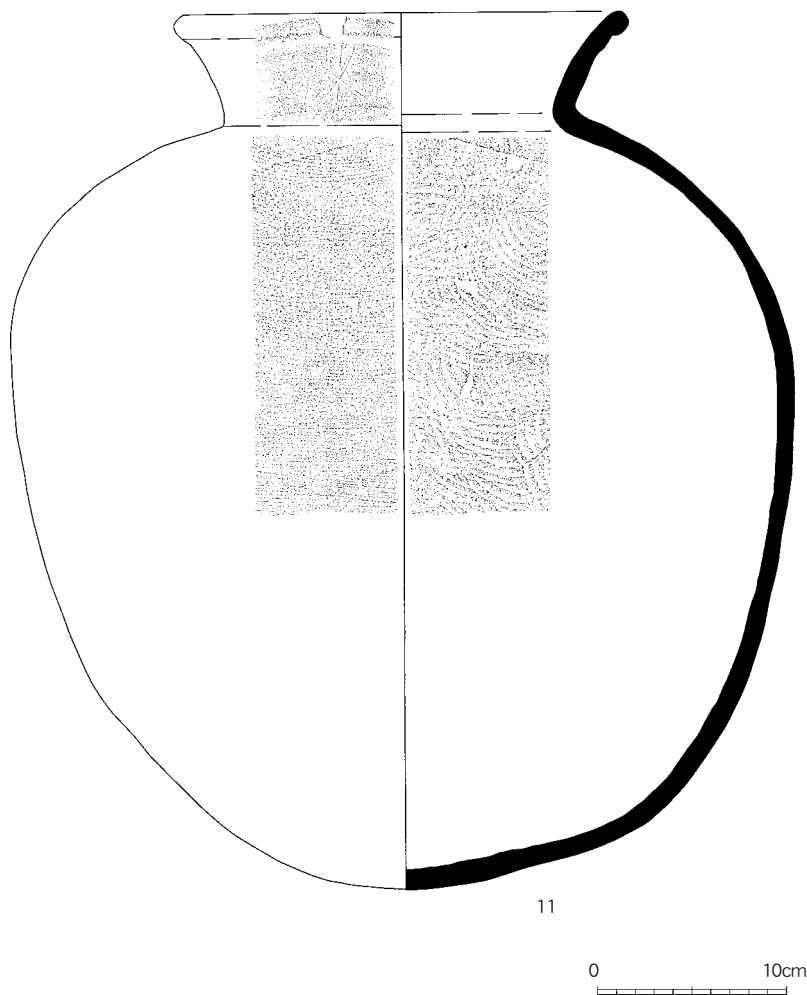
主な遺物を掲載するが、掲載遺物のうち出土場所がはっきりしているものや接合関係にある遺物については第 16 図のとおりである。なお、図示した以外にも須恵器甕などの遺物が出土している。

**須恵器** (第 18～22 図、図版 9・10)

横瓶 (1) 口縁部は外反して開き、口縁上部で短く外湾して端部はシャープに仕上げる。体部を欠くため、平瓶の可能性もある。復元口径は 10.5 cm を測る。14 層より出土。

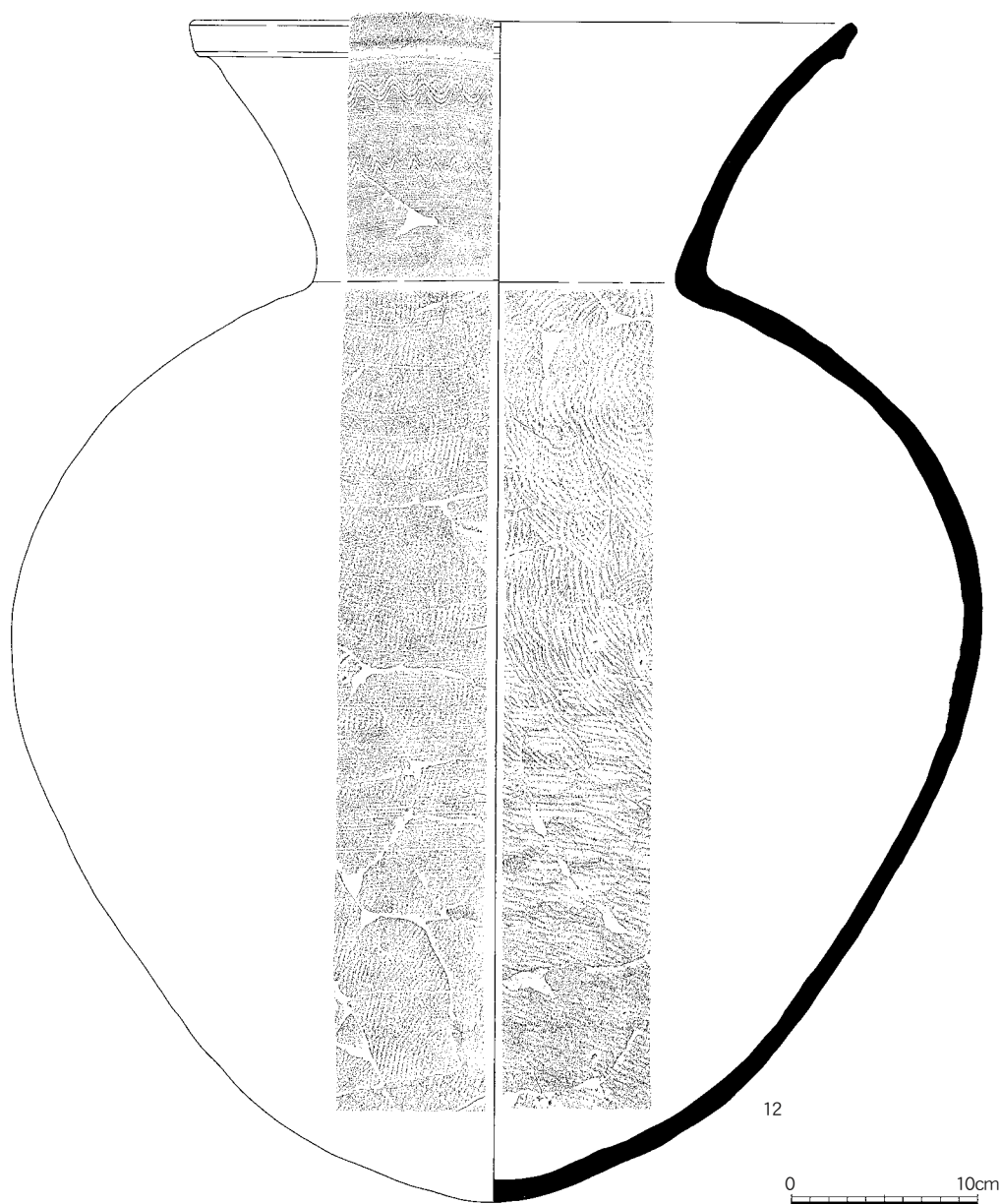
平瓶 (2) 9 は口縁半部と体部下半を欠く。肩部はやや張り気味で、外面にはカキ目が施されている。ヘラ記号は認められない。サブトレンチ内より出土。

甕 (3～12) 3 は口縁部が外湾気味に開き、口縁端部は肥厚させる。口縁部外面には凹線に



第20図 2 トレンチ周溝出土土器実測図④ (1/4)

よって3段に区画し、櫛描波状文を巡らす。周溝西側隅の14層中より出土。4は短い口縁部で、外湾しながら開き、口縁端部と口縁部の中位と下位には櫛描列点文が施されている。口縁端部と内面に自然釉が付着する。復元口径は20.4cmを測る。3の甕と同じ14層中より出土。5は外反する口縁部で、口縁端部は上方にやや尖らす。口縁端部下には沈線状の凹みが巡る。復元口径は26cmを測る。周溝中央の14層中より出土。6・7は口縁部上半と体部下半を欠く。6は外面体部と口縁部の内面に自然釉が付着する。内面には同心円文のタタキ痕が残る。14層中より出土。7は口縁部が大きく外反し、外面には疑格子タタキ、内面には同心円文のタタキ痕が残る。周溝内側の8層中から周溝内の14層中にかけて出土している。8は口縁部上半と底部を欠く。体部は卵型で、



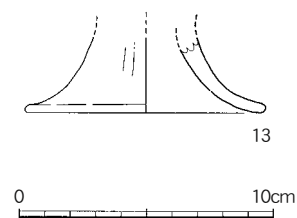
第21図 2トレンチ周溝出土土器実測図⑤ (1/4)



口縁部は外反して大きく開きそうである。外面は疑格子タタキ、内面は同心円文のタタキが残る。復元胴部最大径は 50.5 cm を測る。この甕の破片の出土位置は周溝内側の 8 層中から周溝内の 14 層中にかけての範囲で出土している。9 は口縁部上半と体部下半を欠く。口縁部は外反して大きく開きそうである。外面は疑格子のタタキ、内面は同心円文のタタキが残る。8 層中より出土。10 は体部が無花果型で、口縁部は外反して大きく開き、口縁端部は外方に肥厚させる。口縁部の上位には二条、中位には一条の凹線を巡らす。外面は疑格子のタタキ、内面は同心円文のタタキが残る。復元口径は 40 cm、胴部最大径は 57.6 cm を測る。この甕の破片も甕 8 と同様に周溝内側の 8 層中から周溝内の 14 層中にかけての範囲で出土しており、甕 8 の破片と同じような分布範囲を示す。11 は体部が卵型で、口縁部は短く外反して開く。口縁端部は肥厚させ、丸く仕上げる。外面はカキ目状のナデ、内面は同心円文のタタキが残る。口径は 23.2 cm、胴部最大径は 41.4 cm、器高は 46.4 cm を測る。この甕の破片も甕 9・10 と同様に周溝内側の 8 層中から周溝西側隅の 14 層中までのかなり広い範囲に分布している。12 は体部が卵型で、口縁部は外反して大きく開き、口縁端部は肥厚させる。口縁部の上・中位にそれぞれ一条づつ櫛描波状文を巡らす。外面は疑格子のタタキ、内面は同心円文のタタキが残る。口径は 35.4 cm、胴部最大径は 52.3 cm、器高は 63.6 cm を測る。周溝西側の 8 層中からまとめて出土した。

**土師器** (第 22 図、図版 10)

高坏 (13) 脚部の上半部と坏部を欠く。脚は大きく外反して開き、端部は丸く仕上げる。外面は縦方向のケズリ、内面はナデ仕上げ。外面には赤彩が施されている。復元底径は 9.4 cm を測る。サブトレンチ 1 より出土。



第22図 2トレンチ周溝出土  
土器実測図⑥ (1/3)

**(6) その他の出土遺物** (第 23 図、写真図版 11)

調査中に出土したその他の遺物をまとめる。

**須恵器** (第 23 図 -1、図版 11)

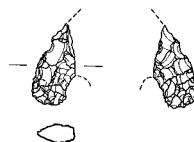
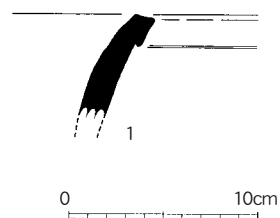
1 は須恵器の甕の口縁部である。口縁端部は肥厚する。全体的に磨耗が著しい。墳丘上での表採品。

**縄文土器** (第 23 図 -2、図版 11)

2 は押型文土器の深鉢である。外面には楕円文が施文されている。2 トレンチ内の出土品。

**石器** (第 23 図 -3、図版 11)

3 は石鏃で、片脚を欠く。黒曜石製。1 トレンチ内の一括品。



第23図 その他の遺物実測図  
(1/4・1/2)

### 第2表 出土土器観察表

挿図番号	トレンチ	遺構名	種別	器種	法 量				調 整		胎土	焼成	色 調		備 考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第11図-1	1トレンチ	周溝	須恵器	坏蓋	-	-	-	(2.7)	回転ナデ	回転ナデ	E H	良	暗灰色	暗灰色	
第11図-2	1トレンチ	一括	須恵器	坏身	-	-	-	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰色	灰色	
第11図-3	1トレンチ	周溝	須恵器	高坏	(10.0)	-	-	(3.1)	回転ナデ	回転ナデ	H	良	黒灰色	黒灰色	
第11図-4	1トレンチ	周溝	須恵器	高坏	(11.6)	-	-	(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	E H	良	暗灰色	暗灰色	
第11図-5	1トレンチ	一括	須恵器	高坏	-	-	(10.0)	(2.2)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰褐色	灰褐色	
第11図-6	1トレンチ	一括	須恵器	埴	(7.2)	(11.7)	-	(3.7)	回転ナデ	回転ナデ	E H	良	灰色	灰色	
第11図-7	1トレンチ	周溝	須恵器	甕	-	11.1	-	(11.1)	カキ目	ケズリ	B	良	灰色	灰色	
第11図-8	1トレンチ	周溝	須恵器	平瓶	(6.4)	-	-	(13.7)	カキ目	回転ナデ	B	良	青灰色	青灰色	浮文、ヘラ記号あり。
第11図-9	1トレンチ	周溝	須恵器	甕	(51.4)	-	-	(12.1)	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰色	灰色	口縁に斜行線・斜格子目文。
第12図-10	1トレンチ	周溝	土師器	高坏	(24.0)	-	-	(2.2)	ミガキ	ミガキ	E	良	赤色	赤色	
第12図-11	1トレンチ	周溝	土師器	高坏	(33.2)	-	-	(3.8)	ミガキ	ミガキ	E	良	赤色	赤色	
第12図-12	1トレンチ	一括	土師器	高坏	-	-	-	(3.6)	ナデ?	ケズリ	DH	良	橙色	橙色	
第12図-12	1トレンチ	周溝	土師器	高坏	-	-	-	(4.3)	?	ケズリ	E	良	橙色	橙色	
第12図-14	1トレンチ	一括	土師器	高坏	-	-	-	(3.8)	ナデ?	ケズリ	BH	良	橙色	橙色	
第12図-15	1トレンチ	一括	土師器	高坏	-	-	-	(4.3)	ナデ?	ケズリ	H	良	橙色	橙色	
第12図-16	1トレンチ	周溝	土師器	高坏	-	-	(11.4)	(6.8)	?	?	B	良	橙色	橙色	
第12図-17	1トレンチ	周溝	土師器	高坏	-	-	-	(8.6)	ナデ	ナデ	B	良	赤色	橙色	
第12図-18	1トレンチ	周溝	土師器	高坏	-	-	-	(9.8)	ミガキ	ケズリ	C D	良	赤色	橙色	
第12図-19	1トレンチ	周溝	土師器	高坏	-	-	-	(14.2)	ナデ?	ケズリ	C D E	良	橙色	橙色	
第13図-1	1トレンチ	1号土坑	須恵器	坏蓋	-	-	-	(2.4)	ケズリ	回転ナデ	E	良	灰色	灰色	
第13図-2	1トレンチ	1号土坑	土師器	高坏	-	-	-	(3.7)	ミガキ	ミガキ	B D H	良	明橙色	明橙色	
第13図-3	1トレンチ	1号土坑	土師器	高坏	-	-	-	(4.5)	ナデ?	ナデ	B H	良	橙色	橙色	
第13図-4	1トレンチ	1号土坑	土師器	長頸壺	(7.8)	-	-	(6.2)	ミガキ	ナデ	E H	良	赤色	橙色	
第17図-1	2トレンチ	周溝	須恵器	横瓶	(10.5)	-	-	(3.8)	回転ナデ	回転ナデ	H	良	黒灰色	黄灰色	
第17図-2	2トレンチ	周溝	須恵器	平瓶	-	-	-	(8.1)	回転ナデ	回転ナデ	E H	良	暗灰色	明灰色	
第17図-3	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	-	-	-	(10.6)	回転ナデ	回転ナデ	E H	良	黒灰色	黒灰色	口縁部に櫛描波状文
第17図-4	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	(20.4)	-	-	(7.3)	回転ナデ	回転ナデ	E H	良	明灰色	明灰色	
第17図-5	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	(26.0)	-	-	(4.9)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	黒灰色	黄灰色	
第18図-6	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	-	-	-	(5.9)	ナデ	タタキ	E	良	灰色	灰色	
第18図-7	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	-	-	-	(12.2)	回転ナデ	タタキ	E	良	灰色	灰色	
第18図-8	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	-	(50.5)	-	(43.8)	タタキ	タタキ	E	良	灰色	灰色	
第19図-9	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	-	-	-	(17.8)	回転ナデ	タタキ	E	良	灰色	灰色	
第19図-10	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	(40.0)	(57.6)	-	(56.7)	タタキ	タタキ	A E	良	暗灰色	暗灰色	
第20図-11	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	23.2	41.4	-	46.4	カキ目	タタキ	A E	良	灰色	灰色	口縁部にヘラ記号
第21図-12	2トレンチ	周溝	須恵器	甕	35.4	52.3	-	63.6	タタキ	タタキ	A E	良	灰色	灰色	口縁部に櫛描波状文
第22図-1	2トレンチ	周溝	土師器	高坏	-	-	(9.4)	(3.0)	ミガキ	ナデ	B H	良	赤色	橙色	
第23図-1	墳丘	表探	須恵器	甕	-	-	-	(5.4)	?	?	B E H	良	明灰色	明灰色	
第23図-2	2トレンチ	一括	縄文	深鉢	-	-	-	(2.8)	押型文	ナデ	A C H	良	明赤褐色	茶褐色	楕円押型文

※単位はcm。( ) は現存長

※A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

### 第3表 出土石器観察表

図版番号	遺構名	遺構名	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
第23図-3	1トレンチ	一括	石鐮	黒曜石	(2.15)	(1.15)	(0.5)	(1.0)	欠損品

※単位はcm。( ) は現存長

## IV. まとめ

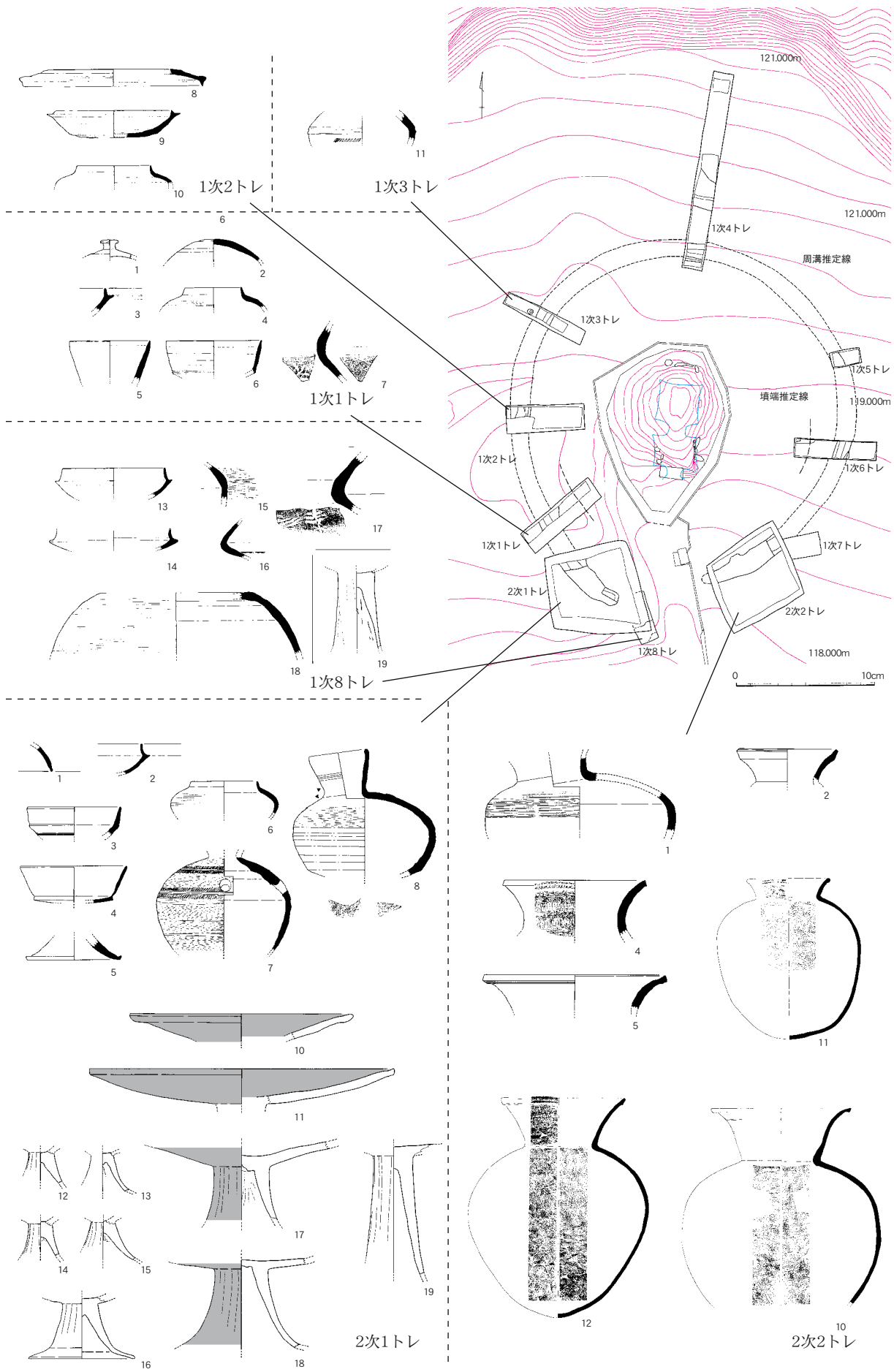
今回の2次調査ではこれまで報告したとおり、古墳前面での周溝の状況が確認され、1次調査で不明瞭であった周溝形態を補完することができた。また検出した周溝からは予想以上に遺物が出土し、古墳の年代を考える上での好資料を得たことも大きな成果である。以下では、1次調査の結果ともあわせてまとめることにしたい。なお、トレンチの記述は略述する。

周溝については各トレンチでの調査内容から幅が23～58 cm、深さが46～105 cm、断面は逆台形状であることが判明した。平面形は各トレンチ検出の周溝を結び、さらに周溝東側端部は玄室奥壁中心点と羨門中心点を結んだ南北主軸で反転した復元線を入れると第24図のような周溝推定線が描ける。その規模は東西軸を1次2 Tと同5・6 Tで結んだ距離が約25 m、南北軸を1次4 Tと2次1・2 Tで結んだ距離が約27 mと約25 mを測る。周溝端部は南北方向にズレが生じており、このため周溝西側半分はやや半馬蹄状を呈し、東側半分は半円状となり、全体的にはやや歪な径25 mほどの円形に巡ることになる。周溝端部間は陸橋部が設けられており、今回は墓道の確認までにはいたっていないものの、これに続く墓道が1次8 Tの溝と考えることもできそうである。

周溝からの遺物は1次調査では少なかったが、2次調査では多くの遺物が出土した。2次1 Tの周溝からは須恵器坏身・坏蓋・高坏・埴・甕・横瓶・甕や土師器高坏など、2次2 Tの周溝からは須恵器横瓶・甕や土師器坏・高坏、土師器の坏・高坏などが出土し、とりわけ前者は土師器高坏、後者は須恵器甕の量が目立つ。こうした遺物の出土状況は調査記録のとおりで、2 Tでは“破碎散布<sup>註1</sup>”が顕著に認められ、甕3個体(8・10・11)の破片が周溝前庭部から周溝内に分布する。これらの甕と同様の分布範囲内レベルに位置する他の甕6個体(3～7・9)や横瓶(1)などもセットとして問題なさそうである。また、1 Tでも2 T同様に“破碎散布”が認められ、土師器高坏(10～19)、須恵器甕(7)・横瓶(8)などはその分布からして一群を形成しそうで、他の周溝出土の遺物に関してもセット関係である可能性は高い。こうした行為は前庭部での祭祀に関わる結果と理解されるが、遺物の出土状況から少なくとも古墳築造後の行為であることは間違いなく、その行為自体が初葬あるいは追葬時なのか、またはこうした儀式とは無関係なのかといった問題にまでは言及できず、今後に残された課題といえる。ただし、二つの群のセット関係には器種構成に大きな違いがみられ、またその位置が異なる点からも同時に行われた行為ではなさそうである。

以上、周溝についてまとめたが、次に墳丘やテラスについての所見をまとめると、1次1 Tにおいて唯一版築層の一部が確認され、その状況から旧表土の上から盛土構築が行われたと判断される。この版築層の途切れる場所は墳丘の墳端<sup>註2</sup>と考えられ、その外側はテラスに相当するほぼ平坦な地山が周溝まで続いている。つまり、周溝の内側に約1.5 m幅のテラスが存在し、そこから盛土が行われていると復元できる。調査段階でははっきりとしなかった1次6 Tでも同様の在り方が認められそうで、そうすれば径19 m程度の墳丘の想定が可能となろう。すでに、1次調査の報告では墳丘は1あるいは2段築成の可能性のあることを指摘しており、墳端から現在の墳頂までのレベルが約4 mあることを考慮すれば2段築成の可能性も否定はできない。

出土遺物の時期については須恵器坏身(1次8 T-13・2次2 T-2)は口縁部の特徴から小田編年のⅢB期に該当し<sup>註3</sup>そうで、これらより時期の下りそうな同編年Ⅳ期にあたる坏身(1次2 T-9)もある。土師器丹塗高坏(2次1 T 11・18)は佐賀県都谷遺跡ST015やST017で出土し



第24図 周溝復元図 (1/400) と出土遺物 (1/6・1/16)

ており、TK43～TK209 併行期に位置付けられている。<sup>註5</sup>この高坏とセット関係にあると考えられる他の遺物もこの時期に比定される。従って、遺物の時期は概ね小田編年のⅢB～Ⅳ期（TK43～TK 209 併行）の6世紀末～7世紀初頭頃に相当するものと考えられ、須恵器甕（3～12）を主体とする2次2Tの一群もこの範疇に収まるであろう。

こうした遺物の年代観はこの古墳の築造年代を考える上での貴重な資料提供となった。これまで同古墳の位置付けについては、複室構造の横穴式石室の玄室プランが胴張りプランとは系統の異なる長方形プランをなしている点や、玄室奥壁上に石柵を設ける特徴をもつ点など福岡県浮羽町や朝倉郡といった筑後川流域沿いの類似古墳にその系譜を求め、装飾壁画のなかでも同心円文や船の彩色の輪郭をたたき窪める手法に注目し、その築造年代をガランドヤ1号墳に後続する6世紀末から7世紀に比定されてきた。<sup>註6</sup>浮羽町朝田古墳群での最後の首長墓といわれる楠名古墳の石柵は穴観音古墳と同様に天井石に石柵が接する玄室構造をなし、7世紀前半代の築造とされている。また、彩色の一部をたたき窪める敲打技法は、その後佐賀県黒谷古墳や福岡県倉永古墳、片縄山古墳群丸ノ口支群V群5号墳・VI群2号墳などでも確認されており、<sup>註7</sup>これらの古墳は6世紀後半から末頃の築造とされている。こうしたことから穴観音古墳の築造年代は従来から考えられてきた6世紀末から7世紀初頭頃という年代観と大きな差はなさそうである。ただし、先の二群の遺物が初葬時のものと判断できない面も課題としてあるだけに、将来の石室床面や前庭部・墓道の調査において、より詳細な年代が確定できることに期待したい。

最後に、2年次にわたって行った調査は、これまでまとめたとおり十分な成果をあげることができた。こうした結果からすれば直面する宅地化に対処するには、少なくとも周溝を取り込んだ古墳全体を包括した範囲へと指定地を拡大することが望まれるところである。危惧されている墳丘の乾燥化や、カビの発生による壁画の老朽化、加えて周囲の畑から入り込む竹の根の進入による古墳への影響など、古墳を取り巻く環境は決して良くない。日田市では現在ガランドヤ古墳群の壁画の保存に向けた史跡用地の買収や確認調査といった整備事業の展開を図っている最中でもあり、この機会に課題が多い穴観音古墳の保存に向けた検討も必要であろう。春になると古墳周辺では地元の祭りで盛り上がる。年々参加者達の古墳に対する関心が高まっていることを思うと、一刻も早い壁画の保護施設の完備と活用できる整備の必要性を痛感する。

註1) 吉留秀敏編 『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第151集 福岡市教育委員会 1987年

註2) 若杉竜太編 『穴観音古墳』日田市文化財調査報告書第41集 日田市教育委員会 2003年

註3) 小田富士雄 「九州の須恵器」『世界陶磁全集2』小学館 1979年

註4) 小松 譲編 『都谷遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(14) 佐賀県教育委員会 1991年

註5) 小松 譲 「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」『古墳時代中・後期の土師器』第5回九州前方後円墳研究会 2002年

註6) 小田富士雄 「古代の日田-日田盆地の考古学-」『九州文化史研究所紀要』第15号 1970年

同 「「豊国」装飾古墳」『風土記の考古学4』同成社 1995年

註7) 佐藤昭則他編 『片縄山古墳群』文化財発掘調査報告書第61集 那珂川町教育委員会 2003年

# 写真図版

図版 1



穴観音古墳（南より）



1 トレンチ遺構検出状況（南西より）



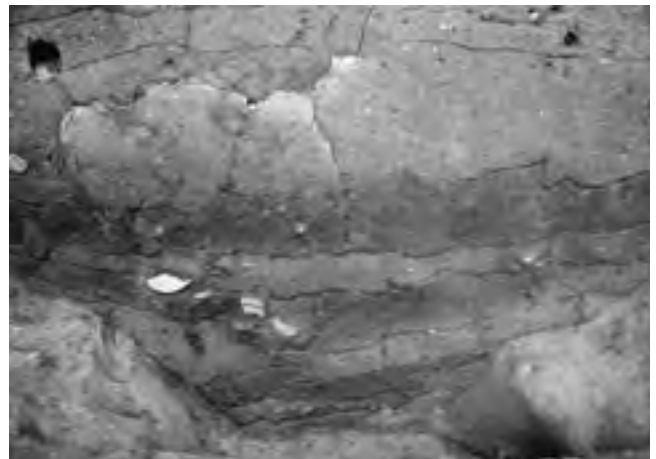
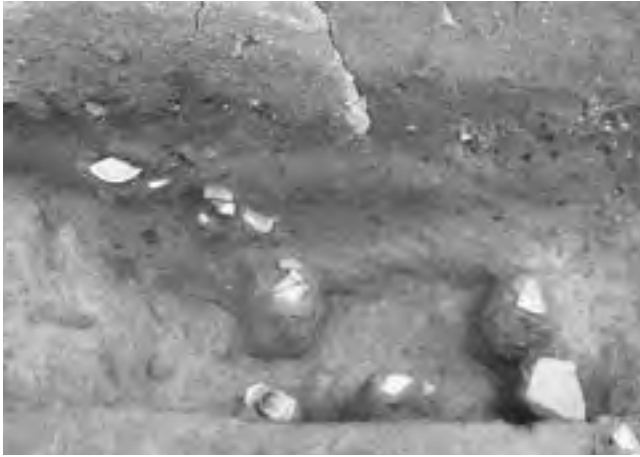
同周溝検出状況（南西より）



図版3



- 左1段目 1トレンチ発掘状況（北西より）
- 左2段目 1トレンチ周溝・1号土坑発掘状況（西より）
- 左3段目 1トレンチ周溝発掘状況（北東より）
- 左4段目 1トレンチ周溝発掘状況（北より）
- 右1段目 1トレンチ発掘状況（北西より）
- 右2段目 1トレンチ周溝・1号土坑発掘状況（西より）
- 右3段目 1トレンチ周溝発掘状況（北東より）



左1段目 1トレンチサブトレンチ1 発掘状況 (南より)  
左2段目 周溝遺物の出土状況  
左3段目 1トレンチ発掘状況 (南西より)  
左4段目 1トレンチサブトレンチ2土層写真 (北より)  
右1段目 1トレンチサブトレンチ1 発掘状況 (北より)  
右2段目 周溝遺物の出土状況  
右3段目 1トレンチサブトレンチ1土層写真 (南より)



2トレンチ発掘状況（南より）



2トレンチ周溝発掘状況（南より）



左1段目 2トレンチ周溝検出状況 (西より)  
左2段目 2トレンチ周溝発掘状況 (西より)  
右1段目 2トレンチ周溝検出状況 (南より)  
右2段目 2トレンチ周溝検出状況 (南西より)  
右3段目 2トレンチ周溝土層写真 (西より)

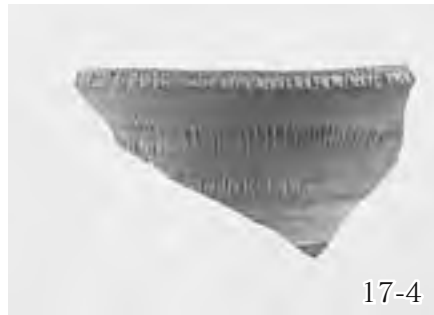
図版7

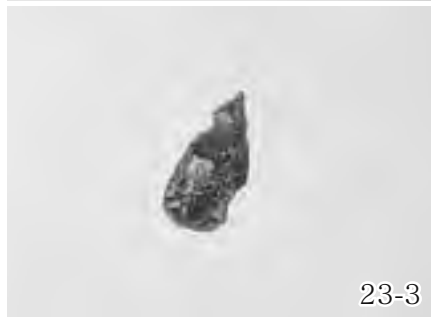


左1段目 2トレンチ周溝発掘状況（東より）  
左2段目 2トレンチ周溝発掘状況（南より）  
右1段目 2トレンチ発掘状況（東より）  
右2段目 2トレンチ発掘状況（西より）  
右3段目 2トレンチ（南東より）



图版9







## 報 告 書 抄 録

ふりがな	あなかんのんこふん
書名	穴観音古墳II
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田地区遺跡群発掘調査報告／日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	5 / 55
編著者名	土居和幸・若杉竜太
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2004年12月3日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
穴観音古墳	大分県日田市 大字内河野 字倉園5番ほか	44204-6	651108	33° 18' 28	130° 54' 21	20031105 ~20031127	73,1㎡	範囲確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
穴観音古墳	墳墓	古墳	周溝、土坑、ピット	須恵器、土師器	装飾古墳

## 穴観音古墳Ⅱ

日田地区遺跡群発掘調査報告5  
日田市埋蔵文化財調査報告書第55集

2004年12月3日

編集 877-0077 大分県日田市南友田町516-1  
日田市教育委員会文化課

発行 877-8601 大分県日田市田島2-6-1  
日田市教育委員会

印刷 877-0086 大分県日田市二串345-3  
日田時報紙器印刷(株)